

2021 年度 文部科学省委託事業

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム

～知的障害青年のための大学教育の創造～

Kobe University Program for Inclusion (KUPI)



2022 年 3 月

神戸大学国際人間科学部

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム (KUPI)
～知的障害青年のための大学教育の創造～

目次

1. KUPI の実践が成熟期を迎えるために	2
2. プログラムの概要と経過	8
1) 募集要項とチラシ	8
2) 説明会開催	8
3) プログラムの内容作り	16
4) 入学者募集の状況と応募、選考	17
5) 神戸大学学生のメンター募集	18
6) 「特別の課程」制度の導入	18
7) 保険の加入、コロナ感染拡大防止について	18
8) 入学式の様子	19
9) 修了式の様子	19
10) オンライン授業の実施について	20
3. プログラムの内容	22
1) 火曜日プログラム「障害共生教育論」	22
2) 水曜日プログラム「よりよく生きるための科学と文化」	50
3) 金曜日プログラム「話し合う！やってみる！」	73
4) 課外活動「WILL 冬のESD ボランティアプログラム」	86
4. メンター学生から KUPI 学生へのインタビューと感想	88
5. プログラムから何を学んだか	103
1) 授業担当教員	103
2) 一般学生の学び	111
3) KUPI 学生の感想と感謝の気持ち	127
4) ボランティアに参加をして	132
6. 訪問者と訪問による報告	136
7. コーディネーターの感想	149
8. おわりに	153
付録 KUPI に関連する論文・学会発表	156

1. KUPI の実践が成熟期を迎えるために

津田 英二

3年目の KUPI

3年目の神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」が終了した。このプログラムは、知的障害者に大学教育を開くことを趣旨として2019年度から開始した実践である。通称をKUPI (Kobe University Program for Inclusion) という。

10名程度の特別支援学校高等部あるいは高等学校を卒業した知的障害者を対象に、10月から2月まで(大学の後期期間)、毎週火曜日・水曜日・金曜日に大学で授業を開講するプログラムである。今年度は13名の受験生が入試に臨み、全員がKUPI学生として合格した。合格の基準は例年どおり、応募要件に該当すること、本人に学習意欲があることという2点であった。合格者13名のうち1名は、生活面の介助を行なうヘルパーと一緒に受講する重度障害のある青年であった。ヘルパーと一緒に受講する青年が、このプログラムの学ぶ場にポジティブな影響を及ぼすのではないかと、という仮説のもと、実験的に入学を許可した

火曜日の授業は、神戸大学国際人間科学部の正規授業である「社会教育課題研究(障害共生教育論)」との合同授業で、自己表現を作品化する課題に取り組んだ。KUPI学生たちは、表現したい自分について考え、それをよく表現する方法を模索し、神戸大学の一般学生(受講生)の助けを借りながらユニークな作品(主に動画作品)を制作した。

水曜日の授業「よりよく生きるための科学と文化」は、KUPI学生のためのオリジナルの講義である。昨年度の授業のラインアップに、スポーツ・健康論、社会保障論が加わった。また、神戸大学附属特別支援学校教員によるものづくりの授業も新たな試みとなった。

金曜日の授業「話し合う!やってみる!」は、昨年度までと同様に話し合いを中心とした主体的な学びに挑戦した。体験新喜劇をはじめとする表現活動を中心としつつ、大学図書館を訪問して図書を借りて読むなど、新しい取り組みもあった。

また、昨年度は新型コロナ感染のために中止となった課外活動も、今年度は実施することができた。当初予定されていた合宿は中止を余儀なくされたが、岡山県のハンセン病療養所への日帰りワークキャンプに3名のKUPI学生が参加した。

新型コロナのオミクロン株の流行により、1月25日の授業からオンライン中心の授業に転換した。オンライン授業は、KUPIにとって初めての経験であった。

KUPIの運営は、コーディネイター2名(河南勝と黒崎幸子)に教員2名(赤木和重と津田英二)が加わり、4名体制の運営会議を中心に行なった。メンター学生は、火曜日に4名、水曜日に5名、金曜日に4名を配置することができ、またそれぞれの曜日にボランティアで参加する人もあった。ボランティアのうち1名は、昨年度と一昨年度にKUPI学生だった青年で、授業の準備や記録作成で活躍した。

KUPIは実践的研究として実施しているプログラムであり、本報告書は実践的研究に資するデータ集として重要な役割をもっている。実践的研究で追究しようとしているのは、プログラムモデルや運営のモデル開発といったことにとどまらず、モデル開発を支える理論的課題でもある。この理論的課題について、いくつかのことを簡単に述べておきたい。

KUPI 学生の成長をめぐる

KUPI の取り組みの最大の意義は、学校卒業後の障害者の学びに対する大学の貢献を追究するところにある。特に、大学教育から排除されてきた知的障害者にターゲットを絞ることによって、参加する障害者にとっての大学教育の意味と、大学の現代的な機能・役割とを両にらみしながら考察せざるをえない。

参加する障害者にとっての大学教育の意味という観点からは、KUPI は、昨年度より「学校卒業後の障害者の学びを支援するための地域連携コンソーシアム」の一部として実施している。このコンソーシアムは兵庫県教育委員会と神戸大学がダブル事務局体制を組み、県内のさまざまな関係機関との間にネットワークをつくり、障害者のニーズに応じた効果的なプログラムの開発や学びの場を担う人材の育成等、実践的な研究・開発を行なおうとする組織である。

また、このコンソーシアムで今年度「兵庫県障害者生涯学習アンケート」を実施した。療育手帳所持者を主な対象とし、2021年9月にGoogle Formsを用いて行なったもので、811件の有効回答が集まった。

この調査結果を端的に述べるならば、障害者は豊富な自由時間を有効に活用できておらず、自由時間を充実する時間にするニーズが高いということであり、また、充実した自由時間を過ごすために何か活動をしたいというニーズをもっているにもかかわらず、そういった活動に参加していない人、できていない人が多いということである¹⁾。

KUPI の場合、ほとんどの学生が、仕事帰りに大学のキャンパスにわざわざ足を運び、空腹や疲労とたたかいながら学ぶ。したがって直接的には自由時間を豊かに活用するという趣旨とはかけ離れている。しかしながら、KUPI での学びは、自身が興味を持った何かに対する好奇心を育て、その好奇心に従って行動する力に関わっているという点で、豊かな自由時間を含めて豊かな人生を間接的に支える可能性があると考えている。

2021年11月5日に実施された「近畿Bブロック・共に学び、生きる共生社会コンファレンス」において、KUPI 学生7名が事例発表を行なった。それぞれの体験や思いを語る中で、“これまで出会えなかった人たちと出会える”“仕事には慣れてきたので、新しい体験をしたいと思った”“自分のことを理解しようとしてくれるところがいい”といった発言が聞かれた。

KUPI 学生たちがプログラムを通してどのような力を獲得しているかという観点からは、これまで具体的な仮説を提示してきていない。特定の能力の向上をめざすプログラムではないことは明らかであるが、KUPI 学生それぞれに成長を実感している関係者は多い。成長の内容は、他者に対する関係形成の力であったり、社会に対する態度であったり、KUPI 学生それぞれの個性的な人格に関わるものであったりする。いずれも容易に言語化することができない成長の感覚であるが、こうした力を明示的に示す努力は学術的な課題として、広い視点から別途取り組んでいる。

大学の役割をめぐる

KUPI の実践は、大学の現代的な機能・役割を検討するための刺激的なサンプルを提示していると考えられることもできる。

近代教育制度の中で、いわば国家の諸機能を維持・強化するための人材＝エリート養成

機関として認識されてきた大学は、大学教育の大衆化を経た現在、18歳人口の大幅な減少と高等教育機関の過剰によって、機能を多元化することで自ら存在証明をしなければならない岐路に立たされていると言っている。

大学の機能について、3つの枠組みで捉えている。1つめは、研究活動と結びついた高度な知識を蓄積し、そこに「エリート学生」を関わらせることによって国家の維持・強化に役立つ人材を育てる機能であり、いわば大学の近代的機能である。2つめは、国家という枠組みを超え、グローバルな課題の解決に関与する人材を育てる機能である。元来、理性の府としての大学は、超国家的な普遍性を追究してきたといえるが、進展するグローバル化によってこの機能の比重が増してきているといえるだろう。3つめは、国民の教育を受ける権利の一形態としての大学教育を保障するという機能である。大学入学の敷居が低くなっただけでなく、リカレント教育や専門職養成に果たす大学の役割が大きくなるにしたがって、大学は個々人が人生を豊かに生きるために利用可能な社会資源として認識されるようになる。

もちろん3つの機能は相互に関連していることが望ましい。しかし、大学に身を置いていると、3つめの機能は副次的なものとして切り離されていると感じることが多い。例えば、四則計算ができなかったり、漢字を正しく書けなかったりする学生への教育は、大学の高度な研究活動の妨げになるという考え方に合理性も正義もあるように感じられてしまう。大学における障害学生支援の原理は、専門教育に必要な能力の本質的な部分が必須であり、それ以外の部分の能力に低下が見られる場合、それを支援によって補完するところにある。この考え方でさえ、未だに大きな抵抗に直面するというのが大学の現状だと言える。

KUPIはこの障害学生支援の原理にさえ則っていない。入学選抜で勘案するのは、学ぶ意欲である。大学の難しい知に触れる意欲があることに価値を置く考え方であり、学生の能力を中心とした大学教育観からは逸脱している。しかし、それゆえにKUPIの実践は、大学教育の常識に対して一石を投じる可能性もつ社会実験としての意義を有している2)。

大学の機能の最適バランスを考えるにあたって、3つの機能の相互関連を意識しておく必要がある。重要なのは、個々人の人生を豊かに生きるために利用可能な社会資源としての大学の機能が、国家やグローバル社会に役立つ人材養成や、それと深く関連する高度な研究の機能に与える影響という観点である。この観点は、一昨年度、昨年度のKUPI報告書でも、一般学生の学び、教員の省察という形で検討をしてきた。学生の指向性や研究領域によって大きく異なるが、KUPI学生と大学教育や研究との接点を探ることが、大学に肯定的な刺激をもたらしていることが語られてきた。これに加えて、グローバルな課題との関係で研究と教育との関係について、提起しえる考え方の一端を記しておきたい。

例えば、2017年の日本学術会議の報告書に次のように書かれている。“あらゆる人材がグローバル、ナショナル、ローカルの領域で育成され活躍する機会を得るためには、「中央」対「周辺」、「エリート」対「社会的周縁」の壁を取り払う政治的なビジョンが必要となる。”

3)

さまざまに絡みあうグローバルな課題の解決のためには、市民社会の成熟が不可欠だという認識は、国際的な議論の流れになってきている。SDGsの主要コンセプトに「誰も取り残さない」no one left behindが謳われていることも、この流れに位置づく。エリートに

よる課題解決というビジョンは、すべての人や組織が協働して取り組むグローバルな課題の解決というビジョンへと大きく転換したのである。その結果、大学に蓄積される知と市民社会との関係は、従来よりも直接的になりその重要性を増す。

これまでの大学教育にとって、知的障害者は最も「周辺」的なグループに属すると言ってよい。大学と市民社会との新しい関係の元で、“「中央」対「周辺」、「エリート」対「社会的周縁」の壁を取り払う政治的なビジョン”をいかに持つことができるか、という問いの中心に、グローバルな課題に関わる大学の知と知的障害者との関係を位置づけることができるかと考えることもできよう。KUPIはこの問いに具体的な形を与える実践でもある。

この点についても、KUPIの実践を契機にしながら学術的に深めようとしている。

4年目に向けて

KUPIは3年目の実践を終えた。1年目、2年目に比べて枠組みが明確となりルーティン化したと感じている。プログラム運営の中核を担っているコーディネーターの仕事に安定が生まれ、多くの業務をこれまでの蓄積に則って遂行できるようになってきた。授業も各教員が試行錯誤しながら、それぞれ一定の型を獲得してきているように感じられる。また、KUPI学生やメンター学生の動きにも慣れが見えてきている。

安定感の獲得は一面では大きな前進である。しかし、「知的障害者に大学教育を開く」というセンセーショナルなキャッチコピーの新鮮さが少しずつ色褪せてくる過程でもある。授業を担当しながら感じる楽しさややりがいも、一山越した感じがある。ここで述べてきた理論的課題は、そのような段階において、KUPIがさらに省察を刺激する実践であり続けるための原動力になりえる。

理論的課題をより実践的なレベルで改めて述べるならば、第一に、KUPI学生の学びの質を捉え言語化するという課題である。これまでも検討を重ねてきた4)が、より深い省察が必要である。例えば、宇宙物理学の授業を受けて、家に帰って家族と月の話をするということは、知的障害のある青年の学びという観点から何を意味するのかということ、容易に説明できないだろう。物質の名称をいくつか覚えたとしても、それ自体の意味は大きくはないだろう。けれども、宇宙物理学の専門的な話を聞くことで、世界がどのように成り立っているかということについてのイメージを膨らませることには、大きな意味があるのではないか。知は総合的なものであり、断片的な知は、自分と世界についての総合的な知の一部として取り込まれる。また、人類が蓄積してきた知を媒介にして他者とつながることにも大きな意味があるのではないか。したがって、KUPI学生の学びの質について省察することは、学習者が獲得する総合的な知のふくらみや、知に支えられた社会関係の重層化に貢献できるようなカリキュラムの設計につながる。こうした課題の追究に関しては、初年度からKUPIの実践に協力をしてきている神戸大学附属特別支援学校とさらに協働を深めるといったことも考えられる。

第二に、知的障害者に大学教育を開くプログラムを全国の高等教育機関に普及していくという課題である。この課題の追究は、学校教育法に位置づく「特別の課程」として実践しているKUPIをサンプルとして、大学にどのような利益をもたらしているのかという点について、明確なビジョンとともに説得力のある形で発信することが中心にある。また、こうした実践が成り立つ条件を明示し、その条件を整備することも重要である。これらの

課題に対しては、実践的研究とその成果発表をはじめとする発信の機会を有効に利用したい。また、KUPI の実践の前提や土台を可視化し、それらを支える制度的枠組みの提案をしていくことも必要である。そのためには、文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室とのコミュニケーションや、兵庫県教育委員会との協働を発展させていくのが効果的だろう。今年度は、文部科学省の政策に呼応する相模女子大学や天理大学の関係者が KUPI を見学するなど、将来につながる明るい兆しがみられた。この動きをさらに活発化させたい。

他にも運営上の課題はたくさんある。KUPI 学生に応募する受験生の人数が多くなった場合の対処、リピーターになっている KUP 学生の扱い（今年度は、一昨年度と昨年度 KUPI 学生として参加した人が、ボランティアという形で KUPI の実践を手伝った）、コーディネイターやメンターの層を厚くしていく努力、水曜日の授業の担当者の調整など、実践に即して解決していかなければならない小さな課題である。これらについても、これまでと同様に記録をとりながら丁寧に進めきたい。

さて、本報告書は、以上で述べてきたような課題を追究するための基礎的な資料でもある。初年度から充実した報告書を作成してきているのは、そのためでもある。今回の報告書の内容も、過去2年のものとひけを取らない充実したものになった5)。2月初旬まで授業を行い、2月中に納品を要求されるというタイトなスケジュールの中でも、毎年これだけのボリュームのある報告書を作成することができるのは、偏に関係者の熱意の賜物である。コーディネイターの黒崎さんを中心に、メンター学生たちが分担してデータを作成・整理し、紙面の作成を行った。

KUPI 学生、メンター学生、ボランティア、火曜日の授業の受講生、コーディネイター、人間発達環境学研究科の事務職員、水曜日の授業担当教員といった、実践の遂行に欠かせない多くの人たちがいる。さらに、KUPI 学生を支え送り出してくれている、KUPI 学生のご家族、KUPI 学生の職場の方たち、連携・協力関係にある神戸大学総務部業務支援室、文部科学省障害者学習支援推進室、兵庫県教育委員会、神戸大学附属特別支援学校の方たちなどもいる。本報告書の編集にあたって、本当に多くの方たちの支えがあって KUPI が成り立っていることを思い起こす。感謝の念をもって本報告書を上梓する。

〈注〉

- 1) 調査結果の詳細は、「障害者の生涯学習を推進する兵庫県コンソーシアム関連情報」の WEB ページからダウンロードすることができる。

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/resources/hyogo-survey-result2021.pdf> (2022年1月現在)

- 2) 学生の能力よりも、意欲や適正に観点を置いた大学教育の実践例は、諸外国に事例がある。韓国ナザレ大学のリハビリテーション自立学部（近藤龍彰、柴川弘子、森本彩、赤木和重、津田英二「知的障害のある青年が大学生になることに関する一考察：韓国ナザレ大学リハビリテーション自立学科の調査を通して」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第7巻1号、2013年9月、pp. 135-152；村田観弥、近藤龍彰、張主善、盛敏、柴川弘子、金鐘敏、赤木和重、津田、英二「学生間の相互性に着目したイン

クルーシブ教育のケーススタディ：韓国ナザレ大学におけるドウミ制度及び寄宿舎共同生活』『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第9巻1号、2015年9月、pp. 29-43；金丸彰寿、大山正博、川手さえ子、張主善、和田仁美、岩崎陽、塩田愛里、高寅慶、金明淑、金英淑、金榮喆、津田英二「障害学生の「学び」から見るインクルーシブな大学教育の意義と課題～韓国ナザレ大学卒業生のインタビュー調査を踏まえて～」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第11巻1号、2017年9月、pp. 19-36) や、Think College ネットにまとめられている数多くのアメリカの大学教育実践 (<https://thinkcollege.net>) などを参照のこと。

- 3) 日本学術会議政治学委員会比較政治分科会『グローバル化と地域協働のための人材育成—大学/シンクタンク・ネットワーク形成と若者の未来—』2017年、pp. 8-9
- 4) 例えば、井上太一「知的な隔たりの間で共に学ぶとはどういうことか～神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」支援過程の省察から～」津田英二他編『神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム』神戸大学大学院人間発達環境学研究科、2020年3月、pp. 136-146
- 5) 過去2年分の本プログラム報告書は、「学ぶ楽しみ発見プログラム」のホームページからダウンロードすることができる。<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>

2. プログラムの概要と経過

2019年度から開始した新規事業は三年目を無事終えた。津田教授が記したようにプログラムの内容や体制は安定してきた。更に参加者も安定していた。合格した13名のKUPI学生のうち7名は再受講生。メンター学生も13名のうち7名が経験者ということでクラスの雰囲気は入学当初から安定した。

2021年7月中旬から準備を進めた。コロナ禍だが昨年度の経験を活かして早めに対応をした。神戸大学ホームページの「新型コロナウイルス感染拡大防止のための神戸大学の活動制限指針」を常に確認をして準備をすることができたのは良かった

火曜日は津田教授が「障害共生教育論」の講義を担当した。毎年テーマが違うため、再受講生も新たな気持ちで受講できることが良いと感じた。水曜日は7名の教員が「よりよく生きるための科学と文化」のテーマで本プログラムのために特別授業を行った。昨年とは2名の教員が変わった。快く担当を引き受けてくださったおかげで新しい科目を学ぶことができた。金曜日は「話し合う！やってみる！」をテーマにKUPI学生が主体となって活動内容を決めるが、メンター学生が明確なコンセプトを持ち、綿密な打合せを行うことで様々な体験をすることができた。

昨年度と同様に「特別な課程」履修証明制度を利用した。大学の事務との調整はコーディネイターが担当し、今年は事務内容の役割を明確にすることにより、よりスムーズに進めることができた。入学までのスケジュールは大学の事務に伝えて、大学から発行される合格通知書や書類の発送時期は確認しながら行った。スケジュール管理、事務、水曜日プログラム担当教員との打合せは、2名のコーディネイターが行った。

1) 募集要項とチラシ

昨年度の内容を元に修正を行った。前述の通り神戸大学で利用する制度や入学条件、選考方法等に変更はなく、対面で説明会や選考会をする方向で準備を進めた。7月下旬には配布物の準備を整えてホームページにも掲載して学生募集を開始した。

募集要項、チラシ、説明会案内、前年度のプログラム内容、願書などをセットにして、コーディネイターは兵庫県教育委員会や神戸市教育委員会、神戸大学業務支援室、就労移行支援事業所、手をつなぐ育成会などに足を運んで配布し、プログラムの説明を行った。

(資料) 募集要項全文、募集チラシ

2) 説明会開催

8月23日に集団説明会を実施し、希望者には個別対応を行った。参加者は全体で12組あった。昨年度の受講の様子をスライドにまとめたものをプロジェクターで示し、写真からも受講の様子が伝わるように工夫をした。「特別な課程」履修証明制度の説明やプログラム内容に加えて、対面授業が可能かどうかの判断時期も知らせた。新型コロナウイルス感染拡大防止として、換気や手指消毒の準備、受付で参加者の体温記入及び健康チェックなどを行った。

(資料) 説明会の案内

2021(令和3)年度

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム

～知的障害青年のための大学教育の創造～

入学者募集要項

【プログラムの趣旨】

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラムは、大学の資源を無理なく効果的に活用することで、言語によるコミュニケーションが可能な知的障害のある青年に対して、学ぶことの楽しさを感じ、自己理解や他者理解、社会認識を深め、人格を陶冶する機会を提供するプログラムです。大学の知へのアクセスから最も遠ざけられてきた知的障害者の学びに貢献する方策を求める事業として、2019年度から開始しました。3年目の今回も、兵庫県教育委員会と協働ですすめる「学校卒業後の障害者の学びを支援するための地域連携コンソーシアム構築事業」（文部科学省受託研究）の一環として実施します。

このプログラムに参加する知的障害学生は、対話的環境の中で大学の知の世界に親しみ、仲間や一般学生と共に学ぶ機会を得ます。困った時には相談役の学生の支援を受けることができます。十分にこのプログラムの学びに参加した学生には、履修証明書が交付されます。

なお、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のために、対面での授業ができなくなる可能性があります。そのときには、WEB会議システムを利用した授業を行うことになります。

実施期間	2021年10月～2022年2月
場所とアクセス	神戸大学大学院人間発達環境学研究科（神戸市灘区鶴甲3-11） 神戸市バス36番系統 鶴甲団地行 「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ (36番系統のバスは、阪神御影、JR六甲道、阪急六甲の各駅を通ります)

【プログラムの内容】

火曜日	「障害共生教育論」 神戸大学国際人間科学部の授業に参加をして、本プログラムに参加するみなさんと一般学生が話し合いながら共に学び、あるいはお互いに学び合う授業を創っていきます
水曜日	「よりよく生きるための科学と文化」 教育学、哲学、音楽学、心理学、自然科学、健康・スポーツ科学などを専門とする大学教員が、本プログラムのための特別授業を行います
金曜日	「話し合う！やってみる！」 やってみたいことを話し合って計画を立てます。外にも出かけます。神戸大学生も一緒に研究や創作活動をします
課外活動	神戸大学が主宰するいくつかのプログラムに参加をすることができます（任意） それぞれのプログラムについては随時お知らせします

一日の流れ（一例）

	火曜日	水曜日	金曜日
集合場所	神戸大学	神戸大学	神戸大学
16:30~	ホームルーム(夕食も兼ねて)	ホームルーム(夕食も兼ねて)	ホームルーム(夕食も兼ねて)
17:00~	授業 「障害共生教育論」	授業 「よりよく生きるための 科学と文化」	プログラム 「話し合う！やってみる！」
18:00~	休憩	休憩	休憩
19:00~ 20:00	ふりかえり 終了	ふりかえり 終了	ふりかえり 終了

入学から修了までの流れ

- 2021年10月1日(金) 入学式
- 2021年10月5日(火) 授業開始
- 2022年2月1日(火) 授業最終日(予定)
- 2022年2月16日(水) 修了式(予定)

【募集について】

募集人数 10人

- 入学条件
- ・高等学校あるいは特別支援学校高等部を卒業していること
 - ・療育手帳をもっていること
 - ・プログラムの方針を理解し、学ぶ意欲があること
 - ・言語によるコミュニケーションをとる手段があること
 - ・実的な読み書きの力があること
 - ・プログラムに対する家族の理解があること
 - ・期間中、火・水・金曜日の5時までに来られること
 - ・自力通学が可能なこと

- 必要経費
- ・受講料(50,000円) 修了までの全額です
 - ・授業により教材費、活動費(実費)を徴収することがある
 - ・食費(5時から始まる授業の前に学内施設で食事をとることができる)
 - ・参加任意の課外活動費(実費)

見学説明会 日時 2021年8月23日(月) 16:30~17:30

予定が合わない方はご相談ください。個別に案内をいたします

場所 神戸大学大学院人間発達環境学研究科(神戸市灘区鶴甲3-11)

神戸市バス36番系統 鶴甲団地行「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ

F棟2階263室にお越しください

- ・お電話かメールでお申込ください
- ・当日は検温をして発熱や体調管理の確認をお願いします。発熱等で参加ができない方や当日参加ができない方には個別に説明をいたします

【入学選考について】

- 選考方法 ・書類選考
・面接（本人）
・簡単な作文
- 出願書類 ・特別の課程履修願書 | 通 記入例は HP に載せています
・学ぶ楽しみ発見プログラム入学申請書 | 通 記入例は HP に載せています
・保護者同意書
・出身学校の卒業（修了）証明書 → 願書を送付する時に間に合わなければ選考当日に提出をお願いします
- 出願先 〒657-8501
神戸市灘区鶴甲 3-11
神戸大学大学院人間発達環境学研究科 ヒューマン・コミュニティー創成研究センター
黒崎宛て **願書在中**
*出願書類は角形 2 号の封筒で送付をお願いします
*普通郵便で郵送してください
- 出願締切 2021 年 8 月 30 日（月）消印有効
応募者多数の場合、面接の前に書類選考を行うことがあります
- 選考日時 2021 年 9 月 6 日（月）夕方～ 面接と作文があります
- 選考会場 神戸大学大学院人間発達環境学研究科（神戸市灘区鶴甲 3-11）
- 合否発表 2021 年 9 月 7 日（火）発送

入学説明会（合格者のみ） 2021 年 9 月 22 日（水）夕方～

【問合せ先】

〒657-8501
神戸市灘区鶴甲 3-11
神戸大学大学院人間発達環境学研究科
ヒューマン・コミュニティー創成研究センター 黒崎まで
電話 078-803-7970（月・水・金曜日 14:00~20:00）
FAX 078-803-7971
Mail : krsksck@people.kobe-u.ac.jp



以下のホームページから、本要項、願書、同意書をダウンロードできます

（願書は 7 月 30 日以降、ダウンロード可能）

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>

※本事業は、実践的研究として実施するものですので、個人情報等の点で細心の注意を払った上で、プログラムの様子などについて学会等で発表する場合があります

Q&A

1. 入学したいけれど、私にはむずかしいのでは？

大丈夫です。大事なのは学びたいという意欲です。たしかに大学の先生の授業ですのでレベルは高いですが、ゆっくりとわかりやすく進めてもらいます。また、神戸大学の学生さんに協力してもらい手伝ってもらいます。

2. 授業でわからないことがあると、どうしたらいいのでしょうか？

このプログラムは、初めての試みですので一緒に取り組んでいきます。なんでも質問してください。また、付けてくれる神戸大学の学生さんにも気軽に相談してください。

3. 曜日によっては、4時半に間に合わないことがあります、大丈夫ですか？

大丈夫です。仕事や用事で遅れる場合など事前にわかれば、授業内容の説明や途中からの出席に合わせてサポートします。

4. 修了したら、何か資格がとれますか？

このプログラムは、神戸大学の履修証明制度を利用します。修了しても資格や卒業認定にはなりません。KUPIとしての履修証明書は修了式でお渡しします。

5. 入学選考は、面接や作文もあってむずかしそうですが？

入学者の選考にあたっては、まず大学で学びたいという意欲を知りたいと思います。自分のできる範囲で気持ちを伝えてください。簡単な作文ですので、書ける範囲でけっこうです、また、パソコンで書きたいという場合は申し出てください。

6. お金がかかりそうで心配です。

受講料は総額で 50,000 円がかかります。それ以外には活動費の実費(たとえば、金曜日の活動で出かけた場合の交通費や食事に行った際の食事代など)が必要です。それ以外には基本的にはかかりません。

7. 新型コロナ感染が拡大したらプログラムはどうなりますか？

神戸大学全体の対応に従います。もちろん授業は、感染防止対策をとり実施します。対面での授業がむずかしい場合は、オンラインなど遠隔授業も考えます。

8. わからないこと、不安なことはどこに相談したらいいですか？

新しい事業ですので、不安があると思います。何でも遠慮なく問い合わせ先(募集要項に記載されている)に電話して聞いてください。

2021年度

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム

～知的障害青年のための大学教育の創造～

Kobe University Program for Inclusion (KUPI)

学校卒業後の障害者の学びを支援するための地域連携コンソーシアム構築事業の一環



『学校卒業後の障害者の学びを支援するための地域連携コンソーシアム構築事業』
(文部科学省受託研究)

■主な事業内容■

1. 地域連携コンソーシアムの形成
2. 障害者の学びのニーズを踏まえた学習プログラムの開発・実践
3. 神戸大学における学習プログラムの開発

■地域連携コンソーシアム連携協議会■

県教委を中心に、神戸市教委、神戸大学、地元企業、団体、当事者団体などで構成

『コンソーシアム構築事業』の一環で実施

■学ぶ楽しみ発見プログラムの目的■

知的障害や発達障害のある人たちに高等教育の学習機会をつくる委託研究の事業です

■プログラムの特色■

- 神戸大学の資源（設備・人）を活用
- 大学教員の専門性を活かした体験的な学びを提供

学習プログラム 週3日(火・水・金)16:30~20:00



<火曜日> 神戸大学
 16:30 HR (カフェ「アゴラ」で夕食を兼ねて)
 17:00 「障害共生教育論」: 津田英二先生の講義
 神戸大学生と一緒に受けます
 18:40 授業のふりかえり
 20:00 プログラム終了



<水曜日> 神戸大学
 16:30 HR (カフェ「アゴラ」で夕食を兼ねて)
 17:00 「よりよく生きるための科学と文化」
 神戸大学の赤木、伊藤、稲原、岡崎、川地、
 喜屋武、清野、松岡先生による体験型講義
 18:40 授業のふりかえり
 20:00 プログラム終了



<金曜日> 神戸大学
 16:30 HR (カフェ「アゴラ」で夕食を兼ねて)
 17:00 「話し合う! やってみる!」
 やってみたいことを話し合って計画を立
 てます。外にも出かけます。神戸大学生
 と一緒に研究や創作活動をしませう
 18:40 プログラムのふりかえり
 20:00 プログラム終了

- ◆E S D 学び隊 「ワークキャンプ」
- ◆ボランティア体験
- ◆神戸大学でのイベント参加など



【場所とアクセス】

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 (神戸市灘区鶴甲 3-11)
 神戸市バス 36 番系統 鶴甲団地行 「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ
 (36 番系統のバスは、阪神御影、JR 六甲道、阪急六甲の各駅を通ります)

【問い合わせ】

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 3-11
 神戸大学大学院人間発達環境学研究科
 ヒューマンコミュニティ創成研究センター 黒崎まで
 電話 078-803-7970 (月、水、金曜日 14:00~20:00)
 FAX 078-803-7971
 Mail: krsksck@people.kobe-u.ac.jp
 http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html
 ホームページから本要項、願書、同意書がダウンロードできます



2021 年度

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム (KUPI)

説明会 (ご案内)

1. 日 時 2021年8月23日(月) 時 間 16:30 ~ 17:30
受付け 16:15 ~
2. 場 所 神戸大学大学院人間発達環境学研究科(神戸市灘区鶴甲3-11)
神戸市バス36番系統 鶴甲団地行 「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ
F棟2階 263室
3. 内 容
 - ①プログラムの趣旨、募集要項の説明
 - ②プログラムの内容紹介
授業内容の紹介、スケジュール、時間割の説明
 - ③プログラムに協力していただく神戸大学の先生などの紹介
 - ④入学選考について
スケジュール及び選考方法、合否発表と合格後の提出書類について
 - ⑤質問コーナー
 - ⑥校内見学(教室、図書館、カフェアゴラなど)
4. その他
 - *コロナ感染防止対策を十分とって開催します。参加者は検温、マスク着用、アルコール消毒などにご協力ください
 - *説明会の参加がむずかしい場合は、個別に案内をいたします
 - *個別相談にも応じます
 - *願書の提出も受け付けます

【問合せ先】

〒657-8501

神戸市灘区鶴甲3-11

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

ヒューマン・コミュニティー創成研究センター 黒崎まで

電話 078-803-7970 (月・水・金曜日 14:00~20:00)

FAX 078-803-7971

Mail : krsksck@people.kobe-u.ac.jp



*以下のホームページから、本要項、願書、同意書をダウンロードできます

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>

3)プログラムの内容作り

① 火曜日プログラム

火曜日プログラムは、神戸大学国際人間科学部の授業「社会教育課題研究（障害共生教育論）」として実施している。この授業は、発達コミュニティ学科の専門科目であるとともに、社会教育主事の資格に関連する科目でもある。一般学生と KUPI 学生が共に学びあうことを追求するねらいで、プログラムの内容も検討している。

今年度は、KUPI 学生の自己表現を、KUPI 学生本人と一般学生が協働で作品にする活動を通じた学びに挑戦した。自己表現を協働で作品化する授業は、以下の効果をねらった取り組みである。

- ・ KUPI 学生にとっては表現したい自己を省察する機会となる。
- ・ KUPI 学生にとっては新たな自己表現の方法を習得する機会となる。
- ・ 一般学生にとっては KUPI 学生のライフストーリーや人格に触れる機会となる。
- ・ 一般学生にとっては他者の学びや自己表現の支援を実践的に学ぶ機会となる。
- ・ 場合によっては、一般学生が他者への支援の中で自分の専門性を試す機会になる。
- ・ KUPI 学生、一般学生両者にとって、異質性の高い他者と共同で作品を制作する体験となる。

授業は、KUPI 学生と一般学生が知り合うところから始まり、自己表現とは何かということを考え、KUPI 学生が表現したい自己、その自己を表現する方法を検討することで作品を構想し、その構想を実現していく、という段取りで進行した。表現手段は自由としたが、動画の撮影と編集を介在させるよう誘導した。動画は、本人の姿や声などが現れることが期待できるし、また新型コロナ感染拡大によってオンライン授業となった場合にも対応可能だという判断があった。

② 水曜日プログラム

水曜日プログラムは、神戸大学人間発達環境学研究科の中で、この事業を理解して協力していただける教員と相談しながら授業づくりを進めている。5名の教員は3年連続担当を引き受けてくれた。2名の教員については津田教授と赤木准教授が協力していただける教員に依頼して、後はコーディネイターが授業日程や授業内容、授業の進め方などについて打合せを行った。津田教授から神戸大学附属特別支援学校の教員に声をかけてもらい、初めて制作の授業を受ける機会を得た。

水曜日の学びの大きなテーマは初年度から変わらず「よりよく生きるための科学と文化」とし、それぞれの専門性を活かした授業づくりをお願いした。一人2回の授業を基本として日程調整をした。打合せでは受講生の特徴や配慮事項、再受講生の割合、メンター学生の役割などを知らせ、授業を進めるにあたってのお願いを文書で提示して理解をいただいた。

シラバスの作成、できるだけ視覚的にわかりやすい資料の作成、ワークやグループディスカッションを取り入れた授業の工夫などをお願いした。また、専門性のある内容を KUPI 学生のペースに合わせてゆっくりと精選して授業を進めていただけるよう、無理なお願いもさせていただいた。

今年度も新型コロナウイルス感染拡大の状況によってはオンライン授業になることも想定して打合せを行い、対面授業の教室は昨年度より広い教室を確保した。

授業後は KUPI 学生、メンター学生、コーディネイターが約 1 時間のふり返しを行い、KUPI 学生が帰った後は、更にメンター学生とコーディネイターがふり返しを実施することで、可能な限り教員にフィードバックをしてきた。

③ 金曜日プログラム

金曜日プログラムは「話し合う！やってみる！」のテーマの通り、やってみたいことを出し合って話し合い、みんなで様々なことを体験するプログラムである。今年度もコロナ禍で課外活動を計画することはできなかったが、構内施設（図書館、体育館、構内カフェでの展示鑑賞）で活動をしたり、神戸大学の別キャンパスの図書館を利用するなど、教室を飛び出した活動を取り入れることができた。教室を飛び出して活動をしようとしたのはメンター学生だった。KUPI 学生のやってみたいことを土台にメンター学生が計画を立てたが、同じ大学生として経験してほしい内容をいくつか提案してくれた。例えば、読書会開催や図書館の利用。図書館を利用する際は司書と事前に打合せをすることにより、1 年生に実施するガイダンスと同じ資料を受取り、説明を聞くことができた。図書カードを手にする、毎週のように図書館で本を借りる KUPI 学生もおり、借りた本の内容を共有する時間も有意義であった。その他、困りごとを出し合って話したり、表現活動（ダンス、手話歌、詩、絵）など、次々やってみたいことが溢れてきた。全員で活動する、又は希望する内容に分かれて活動する、をうまく使い分けて、より多くの体験をすることができた。このような充実した活動になったのは、メンター学生が時間をかけて毎週打合せをしてくれたからである。

外部から講師を招いて「体験新喜劇」を行った。昨年と同様の企画で放送作家の砂川一茂氏、中川佑希氏（オフィスゆうき代表）、堀口昌宏氏（学校教員）の 3 名に来ていただいた。当プログラムの実施メンバーである赤木准教授が参加をして「体験新喜劇」のねらいを KUPI 学生に話した。赤木准教授は講師と KUPI との調整役、録画や発表会の WEB 配信などを担当した。

4) 入学者募集の状況と応募、選考

学生募集をする前に前年度の受講生から再受講をしたいと連絡があった。応募は 13 名あり、9 月 6 日に選考を行った。

ホームページに詳細が載ると以下の問い合わせがあった。①授業は何時に終わりますか？②住む地域にも同様のプログラムがあるか知りませんか？③数年後もこの取り組みは続いていますか？など。①プログラムは 20 時に終わると伝えると、翌朝起きられないかもしれない、作業所に慣れていないから検討します、と聞いた。②大学での継続した学びは全国でもほとんど例がないが、オープンカレッジで講座を開催している大学が増えていると伝えた。③次年度（2022 年度）は開講予定だがそれ以降は未定と伝えた。

選考検査は面接（本人）と作文選考を実施した。面接はグループ面接（約 20 分）で津田

教授と赤木准教授が担当をした。作文は原稿用紙を準備して3つの題に対して好きな題を選んで書いてもらった。パソコン入力を希望する受験生にはパソコンを準備した。



5) 神戸大学学生のメンター募集

今年度は、神戸大学国際人間科学部及び人間発達環境学研究科の学部生、大学院生、卒業生、計12名がメンター学生として活躍した。昨年度に引き続いて2年目、3年目の学生が5名おり、残りの7名が初めてメンターを経験する学生であった。また、今年度はボランティアが4名活躍した。ボランティアは、雇用契約を結ぶことができない学生や神戸大学職員、ボランティアをしないと申し出た昨年度までのKUPI学生であった。火曜日はメンター4名、ボランティア2名、水曜日はメンター5名、ボランティア1名、金曜日はメンター4名、ボランティア1名が参加した。

6) 「特別の課程」制度の導入

昨年度に引き続き、学校教育法に規定される、大学等における履修証明制度を活用した。詳細の資料は昨年度のものに準じているので、昨年度の報告書を参照いただきたい。

今年度は、履修証明書の発行手続きを改善するため、授業の修了日から修了式の間に一週間以上の時間を空けた。それにより、評価委員会と教務委員会の承認を得て履修証明を発行することができた。

7) 保険の加入、コロナ感染拡大防止について

保険は、「学生教育研究災害傷害保険」(任意)の案内を行った。4か月間のプログラムだが、ほとんどのKUPI学生が加入をした。

コロナ感染拡大防止については神戸大学の指針に従った。換気や手指消毒の他には、教室入り口に健康確認表を置いて体温や体調などの記入をお願いした。メンター学生やスタッフなど授業に参加をした人数の確認も行った。KUPI学生には健康チェック表を配布して

記入してもらい、授業日に確認することを修了式まで続けた。

構内のあちこちに手指消毒が設置されていたため、トイレのあとや入室した時など、こまめに消毒をする青年が多かった。

8) 入学式の様子

10月1日(金)、入学式のオープニングはKUPIの授業を担当する岡崎准教授(ピアノ)とメンター学生の井上氏(ドラム)、橋澤氏(チェロ)がウエルカム演奏で入学を祝ってくれた。素敵な演奏を聴いて少し緊張がほぐれた。

入学式は津田教授の開式の辞で始まった。神戸大学国際人間科学部 青木茂樹学部長と神戸大学業務支援室 吉見和男室長からお祝いの言葉をいただいたあとは、入学生が宣誓を語った。勉強をしたい、音楽を習いたい、友だちを作りたい、など様々な誓いを受取った。再受講生は先輩として後輩に伝えたいことやこれまでの経験を立派な語った。その立派な宣誓に関係者は彼らの成長を心から喜んだ。入学式には金曜日を担当するメンター学生やボランティアも参加をして、入学式の後にはガイダンスを行った。丸くなってみんなの顔が見えるように座り、金曜日にやってみたいことを出し合った。



9) 修了式の様子

2月16日、兵庫県は新型コロナウイルスによる「まん延防止等重点措置」が発出中だったため、最小限の人数、式の簡素化をもって対面で実施をした。予定していた来賓者からはお祝いのメッセージを受取り、メンター学生やボランティアさんにはオンラインで参加をしてもらった。(3名のメンター学生には手伝いとして参加を依頼した)壁面には授業や活動で制作したものを展示して参加者にみてもらった。

久しぶりに全員に会えた。それだけで嬉しかった。修了式のオープニングはT君のマリンバ演奏で始まった。開式の辞で津田教授からお祝いの言葉をいただいた。自己表現は楽しかった、みんなが熱心に取り組む姿勢に感動した、勉強になることがたくさんあったと話した。履修証明書は神戸大学長から発行された。重度障害のある青年には津田教授作成の修了証が渡された。



修了生からの一言は、その場で気持ちを伝える学生、下書きした物を堂々と読む学生、津田教授やコーディネイターあてに手紙を書いた学生があった。中には春に卒業をするメ

ンター学生に「卒業をしないでほしい！！」と強く願う KUPI 学生もおり、みんなの熱い思いが会場に伝わった。お祝いのメッセージは、神戸大学業務支援室吉見和男室長からのメッセージと当プログラムコーディネーターの河南氏からのメッセージを司会者が代読した。河南氏は1月に交通事故に遭遇し入院をしたが、修了式前日に退院をしたのでオンラインで参加をした。オンライン参加のみんなからもメッセージをもらい、離れていてもつながっていた。メンター学生からはお祝いメッセージと KUPI 学生一人ずつに色紙が渡された。有志のメンター学生が WEB を利用して集めたメッセージ集を作成したものだ。神戸大学の教員を代表して赤木准教授からもお祝いのメッセージを聞いた。4 か月間の学びは明日からすぐに役に立つものはないかもしれないけど、いつか役に立つときが来るかもしれないね。経験はこれからの人生を豊かにしてくれるものになったと思います。私も楽しかったですと話した。修了式のあとはたくさん写真を撮り、再会を約束して終わった。

今年度も神戸大学当局の協力、授業を担当して下さった教員のみなさまの協力、そして KUPI 学生と一番近いところでサポートをしてくれたメンター学生やボランティアさんの協力で実践することができた事業だったと強く感じた。無事修了したことを伝えるとともに感謝申し上げます。



10) オンライン授業の実施について

10月5日からの授業は対面で行った。この頃一般学生の授業は対面授業が増えてきたがまだオンライン授業が多いと聞いた。当プログラムは少人数であることやオンラインではサポートがしにくいことから対面授業でスタートすることができた。

1月中旬、メンター学生の一人から新型コロナウイルスの陽性が判明した。教室内に濃厚接触者はいなかったが判明した翌日は休講にして、その後の授業実施方法について関係者で協議を行った。KUPI 学生からオンライン授業が可能かどうかを調査すると7割の KUPI 学生が可能だということが判明した。よって1月25日からの授業はオンライン授業と対面の併用で実施した。オンライン授業が不安な学生、又は授業が始まる17時に帰宅していない KUPI 学生は大学で授業を受けた。

90分間、画面の前で受講をすることは可能か？メンター学生が近くにいないが大丈夫か？と心配をしたが、すぐに取り越し苦労だとわかった。画面の前に座る KUPI 学生は笑顔で楽しそうだった。お互いの名前を呼び合い、声を掛け合った。マスクを外せるので顔がはっきりと見えるのも良い。教室では見られない KUPI 学生同士の交流が生まれていたし、教室より発言回数が多い KUPI 学生もいた。問題があるのは授業をサポートするコーディネーターの方だった。事前にオンライン授業の段取りや機器の使用方法などを確認しておらず、授業がスムーズに進まない画面があった。授業を担当する教員やメンター学生に助けてもらった。この場を借りてお詫びとお礼を伝えたい。

オンライン授業を受ける時の約束（暗黙の了解？）があるが特に伝えなかった。例えば自分が発言する時以外は消音（ミュート）にするなど。周りを見て気づいた学生は消音にしていたが、そうでない学生は他者が発表をしている時に発言するため、声が重なり聞こえにくい時があった。ルールを伝えるべきだと感じたが津田教授はそのままいいと話した。主な理由は二つ。一つはいざ発言しようと思った時に消音解除ができない学生がいた場合、タイミングを逃すだけでなくストレスや不安につながる可能性があること。もう一つは発言が重なると、教室のような雰囲気味わえるからそれも大切であるということだった。確かに発表者に対してすぐに反応（発言）があると教室で受けているようだった。たまに「うるさい！」「音を消してー」の声もあったが、反応は大切だと感じたのでそのまま進めた。授業が終わっても退室することなくいつまでも楽しい会話が続いた。

3. プログラムの内容

1) 火曜日プログラム「障害共生教育論」

火曜日に行われる KUPI プログラムには、今年度 37 名が参加した。

- ・ KUPI 学生 13 名
- ・ 一般学生 3Q : 14 名 4Q : 13 名
- ・ メンター 4 名
- ・ ボランティア 2 名
- ・ コーディネーター 1 名
- ・ 指導教員 1 名
- ・ その他（保護者・ヘルパー） 2 名

以下プログラム内で実際に行ったことを時系列順にまとめる。また自己表現の作品作りでの様子は、日付ではなく各 KUPI 学生に分けてまとめることとした。

【10月5日】

<概要>

授業方針と今年度のプログラムのねらいを伝えた後、今回のプログラムの根幹となる「自己表現」とはどういうものなのかをパワーポイントを用いて説明した。

<詳細>

今年度の火曜日プログラムのねらいを KUPI 学生、一般学生の立場に沿って説明を行った。KUPI 学生にとってのねらいとして、「表現したい自分について考えること」「新しい自己表現の仕方を身に付けること」が挙げられ、一般学生にとってのねらいとして、「KUPI 学生のライフストーリーや人格に触れること」「他者の学びや自己表現の支援を実践的に学ぶこと」「他者への支援の中で自分の専門性を試すこと」が挙げられた。また、KUPI 学生と一般学生の両者にとってのねらいとして、「他者との違いを感じながら、共同で作品を制作すること」が挙げられた。

その後、KUPI 学生と一般学生が持つ自己表現のイメージを明確にするために自己表現について学んだ。

■自己表現したいときはどんなときかについて学ぶ

- ・ 自分のことを人にわかってもらいたいとき
- ・ 自分自身のことを知りたいとき
- ・ 表現したい欲求にかられたとき

私たちはやむにやまれず自己表現を行うことがある。



■自己表現のかたちについて学ぶ

声（スピーチ、朗読、歌う、叫び）、文字（詩、小説、論文）、アート（絵、音楽、ダンス）、もの（写真、ファッション）、存在や行動（何もしない、泣く、走る）など私たちは様々な自己表現の方法を持っている。

■自己表現は権利であることについて学ぶ

「権利とは何か？」についての意見交換も行われた。KUPI 学生/一般学生からは、権利とは、「生きるための最低限のみんながやっていること、できること」「よいこと」「自分が得たもの」なのではないかという意見が挙げられた。津田先生からは、権利とは「当たり前前にできること」であると示された。当たり前前にできるはずのことができないことがある、そういうときに権利が主張されるのだとした。

■表現の自由について学ぶ

日本国憲法第 21 条「集会、結社及び言論、出版その他一歳の表現の自由は、これを保障する」、世界人権宣言第 19 条「すべて人は、意見及び表現の自由に対する権利を有する」より、自己表現は権利であることがわかる。これらが法で認められているのは、わけもなく表現することが禁止されることがあるためである。表現の自由が大切な権利である理由は、表現することと民主主義、表現することと人間の成長とが繋がっているためである。

■民主主義について学ぶ

民主主義とは、私たちがそれぞれ自分の意見を述べ、他者の意見を聞き、それぞれの言い分を調整して、みんなが合意できる結論を導くことを大切に考える考え方である。つまり、自分の意見を表現することから、民主主義が始まる。私たち一人ひとりが大切にされること、無視されないことが、民主主義の基本である。

■” 私抜きに私のことを決めないで(Nothing about us without us)”

知的障害者の社会運動から生まれた名言として、” 私抜きに私のことを決めないで(Nothing about us without us)”がある。知的障害者の意見は聞かなくてよいという考えが広がっていたため、当事者らがそれに反対したという経緯である。皆がきちんと意見を言って、話し合いをし、一番良い結論を出していくことが大切であるとされた。

■自己を表現するための自己について学ぶ

自己は複雑なものである。自身の意見についても再度考え直してみるとそうではないかもしれないと思直すことがあったり、様々な面を同時に持っていたりすることがある。また「大好き」と「大嫌い」などの正反対の気持ちが同時に起こることもある。こうした参加している学生も経験したことがあるかもしれない具体的な経験から、自己・心は複雑さや両義性を持つことが分かる。

■ジョハリの窓について学ぶ

開放の窓、盲点の窓、秘密の窓、未知の窓の4つの窓が存在する。自分自身から自分を見つめなおすだけでは、「盲点の窓」や「未知の窓」にあたる自己の部分を見つけることは難しいだろう。今回のプログラムの中で、他者と共に自己表現を通してコミュニケーションをとることで、自分自身では気付くことの出来ない「盲点の窓」や「未知の窓」を発見することを期待する。

<KUPI 学生の反応>

授業全体を通して、まだ初回の授業ということもあり、一般学生との交流はほとんど見られなかった。自己表現に関する講義が始まった後は、真剣に先生の話の聞いたり、持参したノートや配布されたレジュメに講義の内容をメモしたりする学生の姿が多く見られた。また、長時間にわたって休みなしに講義を受け続けたことに不満を感じた学生も多く、授業後の感想として、休憩時間が欲しいという意見が散見された。Y君は表現の自由について、自身も以前職場で自分の意見を言ったところ、「意見を言うなんて100年早い」のような趣旨のことを上司から言われたことがあり、傷つき理不尽だと感じたことがあると述べていた。

<メンター学生の感想>

初回の授業ということもあって、KUPI 学生/一般学生ともに緊張の色が見られた。指導教員の講義を聴く形式での授業であったこともあり、講義形式の授業に慣れていない KUPI 学生たちは少々圧倒されていた。また、一般学生らは、これからどのような授業が行われるのか不明確であること、さらに異色のメンバーのいる授業であることに戸惑いの色が見られた。今後の授業において、KUPI 学生と一般学生の間でどのような交流が生まれるのか、メンター学生としては不安と期待を抱く授業であった。

【10月12日】

<概要>

関典子先生と共に「からだほぐし」ワークを実施した。また、次回行う自己紹介のための事前準備（自己紹介シート作成）も行った。

<詳細>

まず初めに、KUPI 学生、一般学生、学生メンターが入り混じった状態で一つの大きな円を作り、準備体操を兼ねたストレッチを行った。その後、各グループ5人程度の小グループを作り、ワークが開始された。ワークの内容は、流れている音楽に合わせてグループ内の1人が自由に身体表現を行い、他のメンバーはパネルミラーに映るその1人の表現の真



似をする、といったものであった。各グループごとにのびのびと表現をした後、お互いのグループの表現を鑑賞し合い、感想を共有した。

その後、次回の授業で行う他己紹介への準備として、自己紹介カードの作成を行った。自己紹介カードの内容は、好きなもの、嫌いなもの、家族構成、自身の仕事など、お互いのパーソナリティに関係する様々な項目が挙げられていた。自己紹介カードを書く際には一般学生と KUPI 学生がペアになり、質問や話を行いやすい環境をつくった。カードの作成途中で授業が終了したため、作成しきれなかった人は次週までの宿題として持ち越された。



<KUPI 学生の反応>

「からだほぐし」ワークでは、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため約3名の KUPI 学生が見学という形での参加を選択した。しかし、ワークを行っていく中で楽しそうだと感じたのか、途中から参加をするなど意欲的な姿も見られた。F君は保護者の方やヘルパーさんの手を借りながら、移動や手の動きをまねることで楽しんでいた。また各々ワーク中に流れる音楽に対しても興味を持ち身体を揺らして楽しんでいて、自身の好きな曲にしてほしいなどの意見も聞くことができた。広い鏡張りの部屋が新鮮だったのか、授業後も数人が残り、各自好きなダンスを楽しむ様子が見られた。

自己紹介シートの作成では、質問の意図や漢字をどう書くのかなどについて、ペアの一般学生に質問する姿が見られた。書き終えた KUPI 学生は、ペアの一般学生との対話を楽しんでいた。

<メンター学生の反応>

前回の授業から KUPI 学生と一般学生との間にほとんど交流がなかったため、お互いのことをよく知り合い、仲良くなるための時間としての側面もあったこのワークであったが、KUPI 学生のエネルギーな表現に刺激されたり、グループ全員で同じ動きを表現しようとした際に一体感が生まれたり、非常に有意義な交流の時間になったと思われる。また、KUPI 学生、一般学生のみならず、学生メンターや津田先生も積極的にワークに参加したことで、授業全体の雰囲気も和らいだのではないかと感じた。



【10月19日】

<概要>

KUPI 学生/一般学生でペアをつくり、お互いに「自己紹介」をした。さらに、ペアで全員の前に出て「他己紹介」を行った。



<詳細>

まず、KUPI 学生/一般学生でペアをつくり、先週作成した自己紹介シートを参考にしながらお互いに自己紹介を行った。気になった部分を深堀して話を聴いたり、思わぬ共通点を発見したりと、どのグループにおいても和気あいあいとした様子が見られた。また、相手の一般学生から聞いたことをメモしている KUPI 学生も見られた。次の活動である他己紹介に備えて、原稿を作成した。

その後、ペアごとに順番に前に出て、お互いに紹介しあう「他己紹介」を行った。自己紹介の際に参考にした自己紹介シートをお互いに交換したうえで紹介しあうことで、KUPI 学生もスムーズに発表を行うことができていた。また、発語が困難な KUPI 学生や、みんなの前では緊張してうまく話すことができない KUPI 学生もいたが、一般学生が依然とフォローをし、発表を行っている様子も見られた。発表を聴いている側も笑みがこぼれるような発表が多くあり、非常に盛り上がった。

<KUPI 学生の反応>

自己紹介のペアワークにおいては、ペアの一般学生との会話を楽しむ様子が見られた。とくに自分のことについて深堀されると、うれしそうに返答する学生が多かった。自身の好きなもの/嫌いなものについて「よくわからない」と最初言っていた KUPI 学生もいたが、一般学生が「これは好き/嫌い？」と質問をしていく中で明確にしていくことができていた。他己紹介においては、緊張気味であったり困惑気味な KUPI 学生もいたが、ペアの一般



学生とコミュニケーションをとりながら（どっちが先に発表する？や、どうやって発表するの？など）発表を行うことができていた。発表を聞いている際も、他者の発表に対して発言をするなど積極的に授業に参加する様子が伺えた。

<メンター学生の反応>

KUPI 学生と一般学生が想像以上に打ち解けてペアワークを行っていたこと、さらに、一般学生が自然と KUPI 学生のサポートを行っていることに驚いた。また、KUPI 学生たちは、自分について知ってもらうことに楽しさを感じているように見受けられた。そのような彼ら/彼女らが、今後の自己表現作品において、どのような自分を表現するのか楽しみとなった。

【10月26日】

<概要>

どんな自分を表現したいかについて考えるために、ヒントとして津田先生の自己表現作品を視聴し、それらに関する感想について意見交換をした。

<詳細>

この意見交換を行う際のペアを決める方法として、一般学生が誕生日の早い順に列に並び(言葉によるコミュニケーションなしで)、KUPI 学生も同様に誕生日の早い順に一般学生の列の隣に列に並ぶことで、隣り合わせの学生同士をペアにするという手順をとった。



ペアを決めた後は、津田先生の自己表現作品(生立ち、好きなもの、好きなことなどを自身のサクスの演奏とともに紹介)をスクリーンで鑑賞し、その後意見交換をレジュメに従いつつ行った。レジュメから、津田先生の自己表現作品を通して、「感じたこと」「津田先生がどんな自分を表現しようと思ったか」「自分ならどんな自分を表現したいか、それはどういうことか」をペアで話し合い、全体で共有した。

<KUPI 学生の反応>

津田先生の自己表現作品に対して、感想や意見を持つことはできても、津田先生の立場に立って津田先生が表現したい自己をイメージすることは難しかったのか、意見交換の中でもそれについて触れた KUPI 学生は少なかった。

また、どんな自分を表現したいかを完全にイメージすることができた KUPI 学生もいれば、なかなか自己に関して考えることが難しく自己紹介の内容になってしまうなど、表現する自己をイメージすることに苦戦している KUPI 学生もいた。さらに表現したい自己よりも表現方法の方がイメージが容易であるせいか、表現方法について強く関心を示し、一般学生と共に考える KUPI 学生も多かった。

津田先生の人生に興味を持った KUPI 学生が多く、I 君は特に韓国に興味を持っていた。

<メンター学生の反応>

これまであまり自己表現について具体的にイメージできていなかった KUPI 学生が多かったように思うが、それぞれのやりたいことが浮かんできた KUPI 学生がちらほら見られるようになり、やはり具体的な見本があるとわかりやすいのだと感じた。自身が今後行う自己表現への期待がそれぞれ少しずつ高まっているように感じた。今回ペアをランダムに決めたことにより、少し不満げな KUPI 学生もいたことから、今後ペアの決め方や、固定にするか適宜変更していくかについては、検討が必要だと感じた。

【11月2日】

<概要>

ラハプにおいて作成された「Disabled」を視聴し、それらに関する感想について意見交換をした。

<詳細>

先週の「表現したい自己」、今度はそれを表現する方法について考える。表現する方法について学生たちに様々な選択肢を持ってほしいため、具体例の1つとしてラハプにおいて作成された「Disabled」を視聴した。ラハプとは、知的障がいを持つ団員で構成されている韓国の劇団である。また、「Disabled」はそのラハプの団員たちがつぶやいた声を拾い集めて一曲の音楽にしたもので、その言葉をつぶやいた団員たちが歌うことで出来上がった曲である。



「Disabled」は韓国語の曲であるため、日本語訳した歌詞プリントを配布した。

<KUPI 学生の反応>

動画を視聴する際に、音が大きかったことに耐えられずに退出してしまう KUPI 学生や耳をふさいでいた学生がいた。

曲に関しては、ラップ調だったこともあり、「ラップに関心をもった」「自分の自己表現においてもラップを歌いたい」と述べる KUPI 学生が数名いた。また、歌詞に関しては、具体的にフレーズを指して「ここに共感する」とこれまでのつらい経験や思いを含めて話してくれる学生もいた。多少歌詞に過激な表現が含まれていたため、そこを指摘する KUPI 学生もいた。Hさんは、「悲しい歌詞で、歌詞自体はあまり読みたくないけれど、歌にすると聞くことができる」と述べていた。

<メンター学生の反応>

歌詞に対して共感の声が多数挙がったことは驚きであった。これまでのつらい経験の蓄積がここでの共感として表れているのだろうと感じた。そのような経験を言葉にすることができる場、KUPI 学生にとっては KUPI という場の存在の必要性・重要性を考えさせられる機会となった。自身としても、当事者がどんな思いをもっているのかについて知ることができ、興味深かった。

【11月9日】

<概要>

相模女子大学の方々が訪問され、KUPI の実践を報告するとともに、相模女子大学で行われている実践についてもお聞きした。

<詳細>

F264 教室に相模女子大学の学生と KUPI 学生、一般学生ほか火曜日プログラム参加者が集まり、お互いの実践についての交流を行った。まず、相模女子大学で行われている実践「インクルーシブ・リサーチ」について、実践に参加している学生と勤労青年から発表を受けた。発表では、「障害のある人が学びたくなる大学」を考えることをテーマに、①学生、勤労青年、教職員、市職員などインクルーシブなメンバーで対話を行い、知見を深めていること ②近隣の施設や実践に視察に行っていること ③対話や視察を踏まえ、実際に考えた「私たちが行きたい大学はどんな大学か」といった内容について発表する機会を設けていることなどを紹介された。

次に、KUPI について、KUPI とはどのような活動で、これまでにどういったことを行ってきたのか、などの内容を発表した。学生メンター2名と一部の KUPI 学生(11月5日の”共に学び、生きる共生社会コンファレンス”に参加していた I さん、H さん、S 君、T 君、T さんに加え、当日希望した Y 君、I 君)が前に並び、初めに学生メンターから KUPI についての簡単な説明が行われた。その後、「あなたにとって



KUPI ってどんなプログラムですか?」「なぜ KUPI に参加しようと思ったのですか?」「KUPI のよいところをアピールしてください」といった質問に答える形で、KUPI 学生がそれぞれ発表を行った。「あなたにとって KUPI ってどんなプログラムですか?」の項目では、「会社で仕事をするのとは違う楽しさがある。」(T 君)や「全部楽しいです。新喜劇は初めてしましたが、本番はとても楽しかったです」(I さん)などといった発表がなされた。「なぜ KUPI に参加しようと思ったのですか?」の項目では、「いろいろな勉強をしたいから、たくさん友達を作りたいから」(T さん)、「家以外での過ごし方を体験してみたいと思った」(S 君)、「KUPI でどんな勉強をしているのか気になりました。」(H さん)といった発表がなされた。「KUPI のよいところをアピールしてください」の項目では、参加2年目となる M 君が、これまでの KUPI でよかった、楽しかったと感じたことについて、全17個の内容を発表した。

相模女子大学、KUPI のお互いの実践についての発表を聞き終えた後、質疑応答の時間が設けられた。お互いの実践内容についてや、実践に参加してみてどう感じているか?などの質問がなされた。質疑応答の一環で、I さんが金曜日プログラムで詠んだ詞を学生メンターに朗読するよう促したり、KUPI 学生の T 君が相模女子大学の学生に向かって「遠くから来て疲れていませんか?」と質問したりするなど、KUPI 学生も積極的に参加していたことが伺えた。

授業終了後、KUPI 学生と学生メンターによって行われる振り返りの時間でも相模女子大学の学生との交流があり、質疑応答の時間で質問しきれなかったことを質問する時間など

が設けられた。その後、相模女子大学の方々と共に神戸大学から見える神戸の夜景を鑑賞し、当日の交流は終了となった。

< KUPI 学生の反応 >

相模女子大学の方々の発表においては、スライドに映し出されている情報を一生懸命メモしている KUPI 学生の様子も見られた。また、質疑応答の時間では、T 君が相模女子大学の方々のことを気遣う様子も見られた。M さんは、神戸大学のマスコットキャラクターである「うりぼー」の人形を相模女子大学のマスコットキャラクターである「さがっばじょー」の人形と交換してもらっていた。このように全体として、ゲストである相模女子大学の方々に興味関心をよせる KUPI 学生の様子があった。

KUPI についての発表においては、多数の KUPI 学生が発表に参加してくれた。KUPI の良さを伝えたい！という思いを感じ取ることができた。

< メンター学生の反応 >

他大学で実践を行っている学生や青年との交流の機会ということで、KUPI 学生にとっても、それ以外の参加者にとっても新鮮な時間であったのではないかと思う。交流会に参加した一参加者として、相模女子大の勤労青年の学びへの意欲の高さや、自分の知らないところでも様々な実践が行われていることを目の当たりにした高揚感などを感じた。質疑応答の時間では、質問をする際も、受ける際も、一般学生が関わるのが少なかったように思えた。

【11月16日，12月7・14・21日，1月11・18・25日：制作】

【2月1日：発表】

上記8日間においては、KUPI 学生それぞれが自己表現作品制作、制作物発表を行った。一般学生とメンター学生は、KUPI 学生とペアになり、KUPI 学生のサポートを行った。

以下では、各 KUPI 学生の制作過程について記述する。1月25日以降は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、オンラインで授業が行われた。オンライン授業の様子、そして発表会での全体的な様子は、本項末尾に別途記載する。

▷ Iさん

Iさんは表現したい自己として、ペアの学生とコミュニケーションをとる中で、「自分自身がものづくりをおこなうことを好きであること」の側面を他の KUPI 学生にも知ってもらいたいと思っていた。Iさんは努力してそれが完成したときの達成感や、それを行うことで家族や周りの人が喜んでくれることが好きで、その一面をこれまでの学校の友人や親しい人に伝えてきたという。KUPI 学生としては今年度で2年目となるIさんは、今回の自己表現作品を通してそういった自分自身のこれまで見せることになかった一面を KUPI 学生や一般学生、またメンター学生のみならず、他のコミュニティで得た友人同様に知ってもらいたいと感じていたようだ。



彼女の得意なもの・ことを紹介することが決まった後は、どういう風にそれらを紹介するかという話し合いが行われた。Iさんは、そのなかでも「作っている過程や作っている最中の自分の姿をみんなにみせたい。」という思いがあった。その思いも踏まえ、表現したい自己である「自分自身がものづくりをおこなうことを好きであること」を伝えるために、これまでIさんが作成してきたもの(実際にカバンに付けている毛糸でできたお花)とIさんが実際に作成をしている姿(ちぎり絵をしている姿、料理をしている姿)を撮影し、その動画をみんなに見せるという形をとることにした。



さらに、Iさんは自身が得意とする手話をしたというアイデアや、自身が好きな歌の要素も取り入れたいというアイデアを出してくれた。そのため、手話と歌の両方を組み合わせた手話歌を動画の一部に組み込むこととした。また、その中で、今年度はIさん以外にも手話ができる KUPI 学生が2人いたことを受けてか、他の KUPI 学生の自己表現作品のアイデアとして他の学生にも手伝ってもらおうというアイデアが出ていることに感化されてか、Iさんのなかには「みんなでやりたい!」という気持ちが強くあることが分かった。結果として、本授業を受けている KUPI 学生、メンター学生、一般学生全員でIさんが好きで選曲を行った「翼をください」を歌い録音した。また同時に手話ができるIさんを含めた3人の KUPI 学生はその歌詞にあわせた手話も披露して、その映像を動画の素材として使用することとなった。そのなかには歌詞に基づいた手話であっても、解釈や表し方などが違うことにより手話が異なってしまう部分があり、Iさんはそれに興味を惹かれていたようだった。

本番での作品は、「私の好きなもの」というテーマで、毛糸のお花付きの鞆、ちぎり絵制作のコマ送り動画、家で焼きそばを作っている様子、手話歌が取り上げられた。真剣にちぎり絵を制作する様子、楽しそうに焼きそばをつくる様子など、様々なIさんの表情が見られる動画であった。ペアである一般学生は、「動画作成において、どんな色が好きかななどの話もしながら進めることができ、すごく楽しかった。」と感想を述べた。

▷ Oさん

11月2日の授業においては、主にどうやって表現するかに焦点を当てた話し合いが行われ、Oさんの好きな阪神タイガースの応援歌である「六甲おろし」の替え歌を制作することとなった。

翌週の授業においては、替え歌に組み込む内容の題材出し(何を表現するか)のために、メンター学生(この日は休んでいた一般学生の代わりとしてメンター学生がペアを務めた。)がOさんに、質問をしながら対話を行った。まずは、Oさんの好きなものについてたくさんお話を聞いた。阪神タイガースのファンであること、阪神戦をテレビで視聴する時の様子等を教えてくれるとともに、実際に甲子園に観戦に行った時の写真などもうれしそうに見せてくれた。また、好きな歌手についても話をしてくれ、Oさんの意外な趣味を発見することとなった。メンター学生は、「Oさんの好きなもの」だけでなく、ぜひとも「Oさん自身のこと」も歌詞に取り入れたいと思い、少しずつ、Oさん自身についての質問も取り入れていった。質問していく中で、おばあちゃんのことを気遣っていること、家庭での手伝いをうまく回避しようとしているお茶目な面もあることなど普段のKUPIの活動だけでは見えてこないOさんの側面が垣間見えることとなった。Oさんの話してくれた事の中で一番印象的だったのが、KUPIでの出会い、そしてそこでの自分自身の変化についてだった。Oさんのなかで、他のKUPI生との出会いが非常に大切なものであったこと、そしてKUPIの活動によって恥ずかしがり屋だった自分が少しずつ変化していると感じていることが明らかになった。あまりに質問攻めの時間であったために、授業の最後のあたりで、メンター学生がOさんに「たくさん質問されることはしんどくなかった？」と尋ねると、「大丈夫。自分から話しかけることは苦手だけれど、話しかけてもらった上で人とお話をするのは好きだから。」と返答してくれた。おしゃりが好きなOさんも発見することができた時間であった。最終的には、10個ほど題材の案を出すことができ、来週、どの題材について歌詞にしていくのかを考えようということになった。

翌週以降は、六甲おろしが3番までであるため、3つの題材を取り上げようということとなり、何をとり上げるかについて話し合いが行われた。1番に関しては、好きな阪神タイガースについて、2番に関しては好きな歌手について取り上げることが決定し、スムーズに歌詞作成も行われた。1番2番で好きなことについて取り上げたこともあり、3番は自分自身のことについて取り上げたいというOさんの気持ちがあった。たくさん時間を消費し、再度いろいろなキーワードを挙げながら何について取り上げるか考える中で、Oさんのなかに「KUPIに来てからの自分の変化について取り上げたい・伝えたい！」という思いが明確になっていった。

完成した作品は、六甲おろしの替え歌で、歌はOさん自身が歌っており、動画は、Oさんが所有している写真のスライドショーとなっていた。1番は、阪神タイガースについてであった。スライドショーには、Oさんが実際に観戦に行った際の写真やキャンプ地に訪問した際にプロ野球選手ととった写真がちりばめられていた。2番は、好きな歌手についてであった。非常にマニアックな一面を見せてくれるものであった。3番は、Oさん自身



のことについてであった。昔の自分と KUPI 来てからの自分について、KUPI にくる中で、人と話すのが楽しくなったことについてを歌詞にしてくれていた。また、間奏では、お世話になった先生方の名前が挙げられていた。これも O さんの意向であった。KUPI での活動を本当に大切にしている O さんの気持ちが感じられた。ペアであった一般学生は、「何度も修正を重ねて歌を作り上げた。特に三番の歌詞は O さん自身の成長も伝えたいとのことだったのでそれをメロディーに乗せた。替え歌に O さんの魅力を詰め込むことができてよかった。」と感想を述べた。O さん自身も、ペアである一般学生には多大なる感謝を伝えた。

▷ Mさん

自己表現の授業が始まった当初は、あまり M さんが自身の話をしてくれることもなく、「どんな自分を表現したらよいか」というイメージが湧いていないようであった。そのため、M さんが好きなことについてなど他愛もない話をするところから話し合いが始められた。その話の中で、M さんが自分の好きな曲にあわせて画像や映像を流し、歌詞を載せる動画を自作していることや、M さん自身が得意としている手話をもっと広めたいと考えていることが話題に上がった。そこから着想を得たペアの一般学生との話し合いの末、手話につ



いての動画を作る方針が固まった。

方針が決まった次の授業では、一度手話による M さんの自己紹介を撮影し、その動画に M さん自身が字幕を付けて動画を作成した。その後の授業では、「手話を広めたい」という M さんの表現したいことを更に実現するために、「こんにちは」や「こんばんは」などといった日常生活で使いやすい手話を紹介する映像を撮影した。また、M さん自身がいつも行っている歌詞動画という表現も発表に組み込むため、これまでに M さんが作成した動画も発表に組み込むことも決定した。

こうして完成された動画は、①手話を用いた自己紹介、②これまでに作った好きな俳優や YouTuber をテーマにした歌詞動画、③手話講座、の全 3 編にも渡る動画であった。特に、手話講座の動画については、「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」「おめでとう」「よろしくおねがいます」といった日常生活で使いやすい手話を、その語源の話も交えながら教えてくれる非常にわかりやすいものとなっていた。

発表当日は前述した動画に加え、サプライズの形で M さんから他の KUPI へ感謝の気持ちを込めた動画が放映された。これまでの KUPI での活動の写真を集めた動画であり、オンライン開催ながらも感動的な雰囲気広がった非常に素晴らしい動画であった。

動画と動画の間では合成音声も使用されており、Mさんの動画編集技術がふんだんに使用された発表となっていた。

また、手話ができるHKさんやIさんと共に手話歌を歌い、その様子を撮影した動画にも出演していた。HKさんの作品に関しては、「本番で披露するよりも、動画にした方が、歌詞もテロップで入れることができるし、見るひとわかりやすいと思うんだけど、どうかな？動画にするなら私が動画編集やるか？」と自ら提案をし、作品の動画編集の作業を請け負ってくれた。全体を通して、Mさんの好きなこと、手話を広めたいこと、動画編集ができることなど、様々なMさんの姿が表現された自己表現の発表会になっていたのではないと思われる。



長らくペアであった一般学生は、「歌詞動画が好きなんだと教えてくれて、それを採用した。Mさんの編集技術は本当にレベルが高く、ほとんど自分で作業をしてくれた。他の人の手伝いまで請け負っていて、マルチに活躍していて本当にすごかった。一緒にやってくれてありがとう。」と感想を述べており、活動の充実度が伺えた。

▷ HHさん

HHさんは得意なことがたくさんあり、当初ピアノ、Y字バランス、バレエ、掃除・片付け(するとお母さんが褒めてくれるから好き)など様々なアイデアがHHさんから提案された。すべて盛り込むとしても内容が盛りだくさんなため、ペアである一般学生は困惑をしていた。その後、話し合いを重ねる中で、ディズニーが好きだということもわかり、そこから歌や劇っぽい要素も入れたいという話になっていった。HHさん自身、好きなものはたくさんあり、そのことについての話は広がるが、”自己表現”となると何をしたいのかというイメージが難しいようで、「わかんない」とペアの学生に話す場面も見られた。話を聞くとたくさん話してくれるが、自分から何かを強く主張することは苦手であるようにも感じられた。たくさん出た案のなかから3つ採用し、2つをダンス動画にし、1つを当日実際にダンス披露しようということになった。しかし、急遽、授業がオンラインへと移行し、当日に披露することが難しくなったため、当日披露を断念し、プラス2曲分撮影をして、すでに撮っておいた作品にくっつけるということとなった。HHさんはその場その場でやりたいことがたくさん出てくるので、まとめるのに少し苦労したが、ペアの学生が進行上進めなくてはならない部分を押しさえながらも、HHさんのやりたいことをくみ取ることで、結果的にバランス良く作品を完成させることができた。ペアの学生との信頼関係も徐々に築いていけたようだった。ペアの学生が動画の構成や準備の進行について考えている場面でも、HHさんは常に明るく楽しそうで、HHさん自身は苦労したり悩んだりすることなく自己表現の作品をつくれたようであった。



また、ダンスを得意とする HHさんは、Y君のダンスにも積極的に参加をしてくれた。自分の自己表現作品制作の合間に、Yくんの練習にも参加をし、振りを一生懸命に覚えている様子がみられた。

完成した動画は、HHさんが好きな曲（計4曲）に合わせてダンスをするというものであった。1曲目は、他の KUPI 学生から教わった手話が入り入れられており、歌を歌う様子も見られた。また、動画途中では、テロップで、HHさんの紹介文が組み込まれており、「好きな曲をおどる HHさん」の様子だけでなく「HHさんがどのような人物なのか」も感じることができた。動画作成をした一般学生の創意工夫が感じられた。

発表当日 HHさんには緊張の色が見られた。発表動画が流れている最中も、それを視聴する HHさんは緊張気味で、真剣な様子であった。一方で、好きな曲を聞く HHさんの顔には時より笑顔がみられ、いかにそれらの曲が好きなのかを感じることができた。発表終了後、ペアの一般学生は、「HHさんのリアクションがいつもすばらしくて、HHさんの笑い声でいつも私まで明るくなっていた。KUPI 学生、メンター学生、、、みんなのことが大好き！な HHさんだからこそみんなに愛されているんだなと思った。自分にとっての大きな学びになりました。」と感想を述べてくれた。HHさんは、「小さいころから見ていたアニメの曲ができてよかった。またやりたい曲がある。」と今回の発表に関しては非常に満足している様子で、次回への意気込みも見せてくれた。

▷ HKさん

彼女には、授業で自己表現を行うと決定したときから、いや、それ以前から表現したい自分の気持ちがあった。それは、彼女の職場に度々訪れる「彼」を想う気持ちであった。本格的に自己表現の構想が始まった最初の授業で、彼女には赤裸々な思いを語ってもらった。直接会える時間以外にも彼のことを想う時間が多いこと、彼と仲の良い友達に嫉妬してしまうことなど、何も聞かずともたくさんを教えてくれた。そして、この想いを表現することこそが今の彼女自身を表現することになるのでは、という話になった。また、それと同時に、彼女は今勉強している手話に対しても並々ならぬ情熱を抱いていることも教えてくれた。授業内でも同じ KUPI 学生の Mさんや Iさんなどと手話で会話することも多く、表現する方法として手話歌を用いることもすぐに決定した。



手話歌を行うことが決まってから、ペアの学生が変わった。その学生によると、初めは人見知りをしてあまり打ち解けて話すことができなかったが、HKさんがうまくリードしてくれて、スムーズに話を進めることができたようだ。落ち着いた雰囲気でも、コミュニケーションをとることが得意な一面も、自己表現の作品をつくる中で明らかになった。

次は、気持ちを伝えるのに用いる曲を何にするかを定める段階に入った。ここでは、彼への好きという思いを伝える曲と、彼と結婚したいという思いを伝える曲をすることが決まっていたので、ペアの学生が、そのテーマに合いそうな曲を HKさんの様子を見ながら提案していく形で曲を選んでいった。HKさんの中に明確に曲の好みがあるようで、この曲は

好き、嫌いと言語よく進んでいった。その上で、彼への好きという思いを伝える曲は平井大さんの「祈り花」、彼と結婚したいという思いを伝える曲は嵐の「One Love」に決定した。当初は替え歌にするという案もあったが、歌詞はそのまま用いることになった。加えて、I さんの自己表現の中で行われる「翼をください」にも手話歌で参加したので、その練習も行われた。

初めは、発表会当日みんなの前でその場で手話歌を披露する予定だったので、準備の期間はその練習に充てられた。伴奏は津田先生が担当することになっていたのですが、津田先生は音源から伴奏を聞き取り、簡単に譜面に起こしてくださった。しかし、基本的に動画を撮影し、その動画を表現者本人も当日見るという方向性になったので、動画を撮影する段階に入った。結局、カラオケの音源を使って手話歌をすることになったので、津田先生の伴奏が見られることはなかった。「祈り花」については、Mさんとともに表現した。こちらは手話のみの表現であった。「One Love」は歌とともに手話を披露した。撮影した動画を自分で見た際には、録画の中の自分の声を客観的に聞くと、自分の声ではないようで、新鮮さと違和感を覚えていた。撮影も順調に進み、準備の期間ちょうどくらいで完成した。動画の編集はMさんが協力をしてくれた。

発表当日は、「翼をください」、「祈り花」、「One Love」の順で動画が進んだ。「翼をください」では、伴奏津田先生、撮影S君のもと、みんなの歌に乗せて3人が手話を披露した。歌詞を事前に黒板に書いておき、それを確認しながら手話をしている姿が見られた。HKさんは手話の振り付けを完璧に覚えており、力の入れ具合がうかがえた。「祈り花」では、Mさんと2人で手話歌を披露したが、



2人の振り付けが左右反転しているのが、見ている側として興味深かった。利き手によって手話が変わるといった話も練習の中であったようだ。「One Love」では、HKさんによる歌とともに披露していたので、よりHKさんらしさが表われているように感じられた。発表会では、嵐が好きで他のKUPIメンバーであるM君と一緒に歌っている様子も見られた。当日の振り返りでは、みんなのできる手話歌だったのでみんなでしたかったこと、会話の手話と歌の手話を一緒にするのが難しかったこと、自分にはできない編集をしてくれたMさんにとっても感謝していること、手話ができるあくび学生が自分以外にもいて、手話でおしゃべりできたのが嬉しかったこと、手話の検定2級に合格できるよう頑張りたいことを述べてくれた。

▷ I 君

初めの2回ほどは、学生メンターとペアになり、自己表現で実際に何を行うかなどの相談の時間にあてた。基本的に自分から多くを語るタイプではないので、メンターや学生などが聞き取りを進める形で、I君の自己表現について探っていった。I君は好きなこと、興味・関心のあることがたくさんあり、それらに関してはアイデアが多く出てくるのだが、“実際にどのような自分を表現したいか”、“どんな自分をみんなに知ってもらいたいのか”という問いになると、抽象度が上がり明確な答えを出すのが難しそうであった。このままでは、I君の自己表現は好きなものを紹介する時間になり、自己紹介との差別化ができた

いため、内容については決定は難航した。明確な内容が確定しないまま、一旦は”自分はこれらものが好きであること”を知ってもらうため、自己表現を行っていくという方針になった。

また、どのような形で自己表現の発表を行うかについては、人前でダンスをしたりするのは得意としないのでやりたくないと言っていたため、そのような形は避けることとなった。物作りが好きであるということも言っていたので、物作りと自己表現を融合するというアイデアが出た。

それ以降は、発表まで一般学生がペアとなり、自己表現の発表の準備を進めた。一般学生との聞き取りを続けていく中で、彼の好きなものとしてUSJやマリオであることを引き

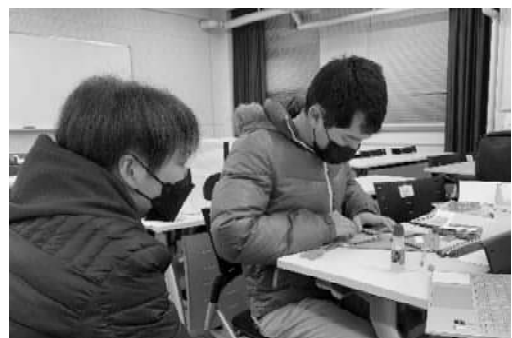


出すことができた。I君の好きな動画を見ながら話すことで、彼実際に話す内容だけではなく話そうとしているときの彼の動きや表情からも読み取ろうとすることができた。メンター学生との聞き出しの結果とも統合させて、物作りを行いながら引き続き自己について聞き出しを行っていくことを決めた。

制作にうつってからは、ひとまず彼が好きだというマリオというゲームの中にでてくるハテナボックスの制作に着手した。ハテナボックスの色や形、また制作をするための道具等にも細かくこだわりを見せ、調整をくりかえした。I君は、ハテナボックスをつくり始めると、制作に楽しさを感じたのか、それともペアである一般学生に親しみやすさを持ち始めたのか、次々と作りたいもののアイデアを出した。中でも、飛び出るカードを制作するのには作り方を調べるところから苦戦し、ペアの一般学生と共に作り方を模索しながら作った。彼自身も図書館で作り方の本を借りてきたり、KUPIの時間外で作成を行ったりするなど、制作について制作の間だけではなくそれ以外の時間も費やすこともあり、とても制作に対して意欲的であることは明らかであった。I君は次々と作成したいものが浮かぶが、それと同様に発表まで時間がないことをわかっており、もどかしさを表しながらも制作を続ける姿が見られた。

また制作をする中で、彼自身の自己について一つ得意なことを知ることができた。それは紙をクジラの形や桃の形に切る際に下書きをせずに、すぐにその形に切り取ることができるという一面だ。彼はどこか空間認識能力が高いような場面をいくつか見せてくれた。

オンライン授業に切り替わってからは、ペアの一般学生が傍にいないことに動揺を見せながらも、同じく学校にいたOさんやその他コーディネーターに手伝ってもらいながら、制作をつづけた。



本番では、ペアの一般学生が事前に撮影を行っていたハテナボックス(裏は音符ボックス)を使ってマリオやUSJのまねを行う動画と、時間が足りないながらも作成を続けた桃太郎、シロナガスクジラ、飛行機などのモチーフが飛び出てくる飛び出すカード4枚を実

際に I 君が紹介及び披露を行った。発表中にはどこからか、すごいという声も飛び出すなど調整を続けた甲斐があったようだった。I 君自身は動画について、他の KUPI 学生の動画のように字幕があったほうが良かったと感じていたようであったが、一方で発表が終わった振り返りの際にも自身の作ったハテナボックスをもって写真を撮ってもらいたいと言うなど制作物に関して本当に愛着を持っていたようだった。

▷ T さん



自己表現の授業の前半は、T さんのペアであったメンター学生と共にどのような自己を、どのようにして表現するのかについて話し合った。そして、「T さん自身がこれまでに気付いていなかった自己」の部分をもどどのように発見するか、また、それをどのように表現につなげていくかと模索していく中で、メンター学生は T さんが大好きなグループである嵐に、その中でも一押しメンバーである大野君に着目した。それは、T さんにとって、好きなものをベースにして自己について話すことが容易であるように見えたためであった。そこで、「嵐の大野君との結婚式」という表現方法を利用し、その表現の中に T さん自身の夢や考えていることを織り交ぜていくことを決めた。

制作を行うためのアイデア出しにあたって、どのような大野君との結婚式を行いたいかを T さんに聞き出していった。すると、T さんは大野君への愛を語りながらも、T さんの持つ今の仕事への気持ちや、今後どのような仕事につきたいか、また、毎日の生活についても語ってくれた。T さんはそれらのテーマについて、現実として存在することと、彼女が理想として描いていることを混在させながら語った。現実的な部分と理想的な部分が織り交ざって T さん自身が形成されているようにメンター学生は感じた。

1 月 18 日の授業で、実際に結婚式を執り行い、その様子を撮影した。撮影は、この式の主役である T さん、ペアとして結婚式の構想を練り、大野君役としても参加するボランティアの Z さん、ピアノ伴奏兼途中から構想に参加した一般学生、撮影をするコーディネーターと学生メンターの計 5 名で行われた。以下に、結婚式当日の様子を記す。

開式の辞が読まれ、『結婚行進曲』のピアノ演奏が始まり、T さんと大野君が入場するところから式が始まった。T さんは少し緊張した面持ちであったが、しっかりと大野君と腕を組み、時折カメラの方に手を振りながら、一步一步歩みを進めていた。2 人が祭壇の前にたどり着くと、シーンは T さんによる結婚誓約書の朗読に移る。これまでの自身のこと一嵐、特に大野君のことが大好きなこと、ヘルパーさんとも嵐について話すことで仲良くなれたこと一や、結婚する大野君への想いなど、Z さんとのインタビューを通して完成された原稿を一語一語丁寧に読み上げていた。朗読の後は、T さんから大野君へ向けた「お祝い歌」が送られた。曲は嵐の『果てない空』。ピアノ伴奏に合わせ、T さんの歌声が教室中に響き



渡った。ずっと Tさんと共に構想を練り続け、式本番では大野君役としてお祝い歌を送られた Zさんの目には、きらりと光るものが見えた。最後に閉式の辞が読み上げられ、式は閉式となった。

式の間、Tさんは少し緊張している姿も見られたが、終始楽しそうに笑っていた。撮影後も「楽しかった！」と何度も繰り返しており、非常に満足している様子だった。

発表当日は、自分の映像が流れる前から発表を楽しみにしている様子が伺えた。編集された映像を見るのは当日がはじめてだった Tさんであったが、自分の姿が映るととても嬉しそうな表情になり、時たま声を出して笑っていた。「お祝い歌」が流れている時には音楽に合わせて動いていた。発表後の感想でも、「大満足!」「本番で映像を始めてみたけどよかった」など、結婚式を通じて自己表現をしたことに満足しているように思えた。

ボランティアの Zさんは「Tさんと作業出来て楽しい時間でした」と語り、ピアノ伴奏としても参加した一般学生も「自分は途中参加であったため、最初は質問をたくさんすることになった。Tさんとはどんな話をしている、最終的にはいつも大野君の話になってしまったため、これはもう大野君と一緒に自己表現をするのだと感じた。楽しかった」と語っており、常に楽しい雰囲気、Tさんの結婚式を実現させようと力を合わせて活動していたことが伺えた。

▷ N 君

自己表現について考え始めた際は、気分がのらなかったせいかペアの一般学生とそりが合わず、話し合いは難航した。ペアの一般学生は、自身がアイデア出しするべきなのか、考えてもらえばいいのか分からず悩んだという。韓国の劇団ラハプのラップ「Disabled」を聞いたのちは、自己の表現方法についても、表現したい自己についてもアイデアが次々とわいてきていた。ペアとなる一般学生を変えながら、N君は KUPI の中で作成する自己表現作品についてだけでは収まらず、時には自身が KUPI を修了した後のライフプランも含めて考えることができていた。

最初は「Disabled」に感化されていたのか、表現方法をラップミュージックに定めており、表現したい自己に関してはなかなか思いつかないようであった。しかし、コミュニケーションを重ねるうちに、N君は自分自身で YouTube やゲームのような作品を表現方法とすることを決めた。そこには N君自身の関心ももちろん含まれていると思うが、昨年度の KUPI より共に参加しており仲良くなりたいたと時折メンター学生に話を打ち明けていた M君に対する思いがあるのだと話してくれた。N君は M君がゲームをよくしていることを知っており、そういった YouTube やゲームのような作品を表現方法とすることで、M君の興味を自分自身へ少しでも向けさせることができるのではないだろうか、と考えたようだった。

また表現方法と同時に表現したい自己についても考えていくことができた。N君は、まず自身の持つ「関西弁(関西に住んでいる自己に対する肯定感)」や「英語を話すことができる」という一面を見つけ、それを表現したいと考



えた。それ以降は自分自身が他者と接する中でどのようなことを重要視しているのか、生きる中で自分自身を肯定するために何を大切にしているのかについてを作品に織り込むことを決めた。

結果 N 君の作品は作品を実際に作成する撮影の段階よりもそれを行うための構想を練る段階に時間をかけることとなった。N 君はアイデアが止まらず次々に着想を得ていくため、実際ペア学生としておこなうことは、N 君自身がおこなう時に考えあげて言ったことを次回につなぎ実現するためにメモしまとめるのみであった。

彼自身のオリジナルの最終的な構想としては、まずゲームが始まる際のオープニングに N 君自身がよく聞いているという曲を選曲し、彼の最終的構想に至るまでに傍にいてくれたペアの一般学生と共に歌うことを選択した。選曲は構想初期にあったラップをペアの学生と行うというものを組み入れたのか、どこかラップ調の曲であるように聞こえた。次にゲームのストーリーの根幹となる主人公 3 人を決めた。N 君とオープニングも共に歌うこととなっている一般学生と N 君自身がオファーをかけて決まった KUPI 学生の M さんである。N 君は彼ら 3 人の出自や職業にもこだわっていた。ここからそれぞれ主人公となる 3 人が 1 話から 9 話にかけてさまざまな出来事に関わっていく。それらのストーリーも N 君自身が好きな極道系ゲームをオマージュしながら自身で作りに上げていった。ペアであるメンター学生が特に興味を持ったのは、M さんが演じる主人公のうちの 1 人の役柄が持つ過去の回想のシーンである。それまでのストーリーは先述したゲームのオマージュのようなものだったが、このシーンでは彼女は楽しかった過去として KUPI での生活を思い出す。本来極道系ゲームには絶対にでてこない KUPI を自己表現の作品に組み込んだということから、3 年間継続して通ってきてくれていた KUPI での生活が N 君にとって楽しいものであるという気持ちを垣間見ることができた。他にもストーリー内にはゲームパート(ゲームとしてプレイヤーがキャラクターを操作することができる部分)が存在し、そこでは彼が生きる中で大切にしている、「人には気分の波があるということ」「プライドを大切に生きていくこと」などに基づいて、キャラクターのパラメーターとして設定した。またストーリー終了後には、N 君が歌詞をつくった曲をエンディングとして流すことを決めた。その曲には N 君自身のどれだけ相手と仲良くしたいと思うからこそ相手に対して強く言うことも必要であるという想いを込めた。またエンディングテーマのメロディ部分を津田先生にお願いして作成してもらったのだが、そこでは N 君自身と今回の作品のターゲットである M 君が好きなアイドルをモチーフにしてほしいとお願いする場面も見ることができた。

以上の構想を重ねながら、プログラム後半となったが撮影のタイミングで KUPI がオンラインでのプログラムとなってしまい、ストーリーのうちの他者と協力して撮影する必要のある部分は断念することとなってしまった。元々ゲーム作品として作成する予定であったため、急遽事前に撮影していた部分以外のところは CM のようなイメージで今後への N 君の創作に対する期待を込めた自己表現作品にすることを N 君と決めた。

N 君は動画を見たあとの感想で、協力してくれる人に対する感謝を述べ、また根本にあった M 君とプレイをしたいという思い、また自分自身が持つ男のあこがれを表現できたことを他学生の前で伝えた。ペアのメンター学生は、この自己表現作品を通して N 君が持つ生き方へのこだわりや、男らしさを大切にしていること、また他の KUPI 学生とさらにコミ

コミュニケーションをとりたいと思っていること、を改めて受け止めることができた。また急遽オンラインでの活動になってしまったことで自己表現作品がN君の構想の100パーセントを満たすものでなくなってしまったが、それに対して彼がKUPIでの生活で着想を得たことや学んだことはKUPIでの生活の中だけで完結するものではなく、これからもあるということを考えているのだと理解することができた。

▷ Y君

Y君は自己表現をすると決まった当初から、歌とダンスを複数のメンバーでやりたいという明確な意思があった。歌とダンスを取り上げた理由としては、それらが得意であること、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンのショーやパレード、劇団四季によるミュージカルなど壮大なパフォーマンスが好きであることからである。複数人で行いたいという希望も、そのような規模の大きなものをつくりたいということと、自分がリーダーとして人に教える姿を見てほしいことから来ている。普段の仕事などではあまりそのような立場になることはないため、憧れを実現したいというような意思が感じられた。

題材については、Y君から劇団四季のロングランミュージカル「ライオンキング」を用いたいという要望があり、迷うことなく決まった。実際に使う音源については、YouTubeからY君が探してきた、海外のライオンキングの音源を使うことになった。しかし、のちのちその音源で使われている言語が、日本語や英語などなじみのある言語でないことがわかった。歌をみんなで歌いたいというY君の当初の要望を考慮すると、歌詞がどの言語であるのかの特定や暗譜が難しいという結論に至り、日本語訳してある歌詞の動画を用いることになった。

構成は、①前奏、②Aメロ・Bメロ、③サビ、④間奏、⑤サビの5つに分かれていた。ダンスチームは前半組と後半組に分かれた。それぞれは、①前奏の部分はY君のソロダンス、②Aメロ・BメロはY君の周りに前半組が加わりダンス、③サビは前半組と後半組が入れ替わりY君と後半組がダンス、④間奏は再びY君のソロダンス、⑤サビはダンスメンバーが全て加わり、途中までダンス、途中からはダンスメンバーは身体を揺らしながら歌をうたうというかたちで行われた。当初は歌いながらダンスをしたいという要望であったが、他の学生の暗記の負担を減らすため、ダンスと歌を同時にすることはなくなった。

Y君はこの活動通してずっと意欲的かつ積極的に取り組んでおり、歌詞を起こしたプリントや、メンバーの名前を記入する表などを作成し持参する姿が見られた。参加するメンバーのキャスティングもY君によって決められ、オフアームも学生らの力を借りつつY君自身で行っていた。

ダンスのメンバーの人数については、当初話していた人数から2人、3人、と増えてゆき、最終的にはサポート、裏方も合わせて15人ほどの大所帯となった。できるだけ大人数で作品をつくりたいというY君のこだわりが感じられた。自らの目的を果たすため主体的に動く姿に、学生やボランティアが感銘を受けている姿も見られた。



ダンスの振り付けについても、Y君自身が考えたオリジナルを用いることになった。振り付けは回転を多く伴い、場所も比較的広く使うダイナミックで、体力的にもかなり消耗するものであった。Y君の振り付けはパターン化されている部分と即興的な部分が融合していた。Y君の周りで他のメンバーがダンスを踊るわけだが、その振り付けをY君と全く同じものにするか、違うものにするかを、ペアのメンターやボランティアは決めきれずにいた。それは、同じにすることにより一体感は生まれるが、Y君にも決まった振り付けを覚えてもらう必要があり、Y君ならではの即興性が失われるのではないかと思う一方で、Y君としては、全員で同じ振り付けをしたというこだわりがあり、バックダンサーの振り付けを違うものにするとはY君の自己表現でなくなるのではないかという懸念があったためである。そして、Y君に双方のメリットとデメリットを説明してもらった結果、やはり全員で同じ振り付けをしたいとのことだったので、その時点である振り付けをもとにパターン化し、全員ができる動きのみで構成することになった。また、ボランティアの助言により、感情を伴う歌詞のところ、それとリンクする動きを取り入れることになった。本番までにみんなの前でY君のダンスを披露する機会があり、そのときに手を叩く振り付けについて音の大きさを指摘されたため、できるだけその回数を減らしたり、音を小さくしたりするなどの配慮を取り入れる姿も見られた。一番最後の振り付けでは、全員で拳を地面に打ち付けたいというこだわりがあり、けがをしないよう気を付けながら全員で実施した。踊ることへの熱量がすごく感じられ、疲れていても時間があれば、休憩するよりも何度も踊りたいという様子だった。ダンスへの愛が周りにとっても伝わっていた。



ダンスの振り付け以外にも、照明や会場の広さ、人が入れ替わる際のはけ方、衣装など、様々な部分にもY君のこだわりがあるようで、それぞれ相談しながら実践していった。振り付けはペアの学生がまとめてパターン化し、授業後の20分ほどを使ってレクチャーが行われた。通しでの練習も何度か行い、発表の2週間前の授業で本番の撮影を行った。Y君としてはその次の週も使って、ダンスメンバーを1人増やしてもう一度本番を撮影するつもりだったようだが、その週の授業がオンラインでの実施となったため、既に撮影しているものを用いた。Y君としては、最後の週撮影できなかったことがとても心残り、やるせなさや悔しさ、申し訳なさを感じているようだった。

発表当日はサポートしてくれていたS君と合わせた10分間の動画(津田先生編集)で披露した。動画を観ながら、今までの思い出が思い出されたのか、涙ぐむ場面も見られた。Y君は、子どもの頃からサークル・オブ・ライフのミュージカルを見に行っていて素晴らしいと思っていたこと、将来はミュージカルの仕事に就きたかったが無理であったこと、だから今回の授業でやりたいと思ったこと、自分の気持ちをどう表現するかで悩んだことを伝えてくれた。ペアの学生からは、Y君の曲への強い思いを感じたこと、最後の週に撮影できなかったY君の悔しさへの共感、思い入れの強い作品に関わってよかったことを述べていた。

▷ S 君

S 君はまずペアの一般学生と共に自身の表現したい自己とそれを表現する方法について考えた。しかし、席に隣り合ってコミュニケーションをとるも、自身の表現したい自己を見つけることはできず、黒板に向かってペアの一般学生が「なんでもいいから書いてみよう」と声をかけても、何も書くことは出来なかった。ただ思いつかないだけではなく、「無だ！！」と話し、S 君にとって表現したい自己はなく、やりたいことも何もないのだと話すこともあった。表現したい自己にも、それを表現する方法にもあまり関心を持たず、考えつくことができないS 君に対してペアの学生も苦戦しているように思えた。

そんな時メンター学生とコーディネーター、指導教員のみの方のふりかえりの中で、Y 君の撮影役をするのはどうかという案があがった。S 君は KUPI プログラムの様々な場面で、自分自身のことについて発言したり行動したりすることに比べて、他者のために発言したり行動したりすることの方が多し。また他者のための行動であればいかなる場合でも率先して行うことができる。そういった側面もまたS 君の自己と考えることができるのである。その時、KUPI 学生の中で表現したい自己と表現方法がある程度定まっており、S 君が介入できそうな作品はY 君の作品であったため、S 君にはY 君の自己表現作品を通してS 君自身の自己表現作品を作ってもらおうこととした。



Y 君の撮影をすることが決まった後は、どのように撮影するのがよいのかについての試行錯誤が行われた。スマホのアプリを使用しながらアングル等の検討を行ったのだが、S 君はどれもしっくり来なかった。それならば「自分なりのアングル」を見つけることにすると意気込み、練習を重ねることとなった。S 君の職人気質な部分が垣間見えた時間であった。また、動画の主演である Y 君の足や体の一部がカメラからはみ出さないようにも気を使うようになっていった。カメラを固定して撮影するか、手で持ちながら撮影するかについても検討がなされた。両方を試しつつ、一時は椅子にカメラをおいて定点で撮るという結論に至っていた。それは、手で持っているとう手が疲れてしまうという理由からであった。しかし、指導教員等からのアドバイスを受け、やっぱり手でカメラをもって撮影するのが一番いいという結論に至った。練習を重ねるうちに、手を疲れさせずに設営をする方法も習得することができた。衣装や背景に関しても指導教員から提案を受けていた。はじめは少々戸惑いの様子も見せていたが、ペアの学生と協力することで、考えを進めることができた。

今回はY 君の撮影役に徹したS くんであったが、気づけばY 君をあだ名で呼ぶなど、Y 君との間に信頼関係を築くことができていた。周囲から見ると、S 君はまるでY 君のマネージャーのようであった。Y 君が別のグループに協力を依頼された際も、S 君はY 君のスケジュール調整を行っていた。

発表動画はY 君と合わせて10 分のものを制作した。練習においてS 君がY 君を撮影している様子に加え、撮影役をしてみてもどのように感じたかについてのインタビューも組み

込まれた。S君は、今回の自己表現作品制作を通して、新たな発見は特になかったと述べたものの、僕の自己表現であると感じました！と述べていた。

発表後、S君は、「終わってほっとしている。またやる機会があっても裏方がいい。」と、役目を終えてほっとした気持ちと、裏方に徹することが自分に適していると感じている様子だった。ペアであった一般学生は、「S君はフランクで話しやすく。カメラに関して、アドバイスするんだけど、我が強くて、どんどん自分でなおしていった。本人が自己表現っていいよってよかったです。欲を言うなら、本番の動画を撮っているS君の様子を撮影したかったな。Y君に関しては、どんどん出来上がっていく様子を見るのがよかったです。」と感想を述べた。

▷ T君

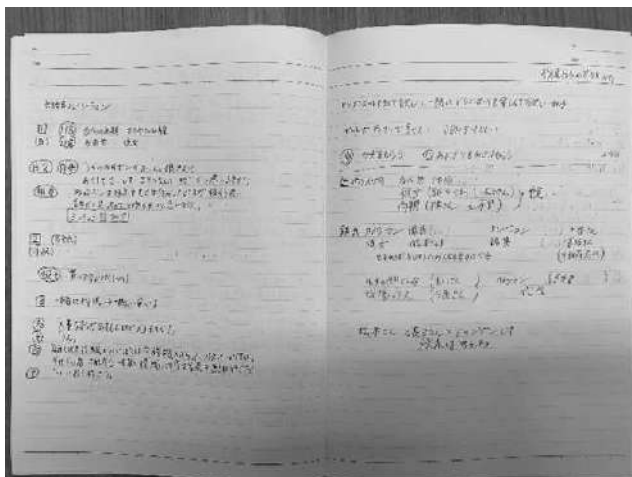
自己表現をするにあたって最初に行われたのが「どんな自分を見てほしいか」「どんな一面があることを知ってほしいか」といった「表現したい自己」を考えることであったが、それが特に難航した KUPI 学生と言っても過言ではないのが T くんである。彼は、ドラゴンボールを題材としたカードゲームに熱中しており、実際に KUPI の授業にキラキラと光るそのゲームのカードを持ってくるほどの熱中っぷりであった。そして、「どんなこと、どんな自分を表現したい？」という質問に対しても、「(実際にカードを見せながら) このカードやこのカードが強いこと」や「(カードの販売促進のために作成された) アニメの予告を流したい」と答えるなど、自分自身についてよりも、自分の好きなものについてに興味を向いていた。しかし、彼にとって非常に大きな存在であるそのカードゲームについて表現することは、果たして彼についての自己表現であると言えるのか、ただ彼の好きなものを紹介することになってしまうのではないだろうかというペアの学生や学生メンターは頭を悩ませることになった。

そんな中、何とか彼について表現しようと様々な質問を行っていたところ、彼が「KUPI を通して恋人を作りたい」と考えていることが分かった。さらに「恋人を作るため、どんな自分のいいところを伝えたい？」や「Tくんにとって恋人ってどんなもの？」「恋人にはどんな条件がある？」などと質問すると、彼がどのようにして恋人と結婚したいか、どんな結婚生活を送りたいかなど、恋人はおろか結婚前後の理想のストーリーを描いているようであった。そして、彼とペアの学生による思案の末、実際にそのストーリーをシミュレーションしてみようということになった。ペアの学生としては、そのシミュレーションの映像を作ることで自身の恋愛観、結婚観を表現し、かつその映像を見ることでそういった自己を客観視する機会になるのではないかという目的があった。そして始まったのが、「結婚シミュレーション」映像の作成である。



自己表現に本格的に取り組み始めてから3回目ほどでペアの学生が変更された。ペアの学生によりT君の気分が左右されることがあったためである。その時点で、場面の構成と

脚本の一部が完成していたため、引き続き残りの場面の脚本を考えていった。T君の亭主関白な一面や、仕事を大事にする姿勢が、脚本を考える中で見られた。この時点では、お気に入りのドラゴンボールのカードの紹介、YouTube上にあるドラゴンボールの動画を織りませ、3部構成で自己表現の作品をつくることが予定されていた。カードの紹介では、T君自身のノートに おすすめのポイントとともにまとめ、それをもとに動画をつくることになった。動画については、どの動画を用いるかをT君に決めてもらい、時間の兼ね合いで、どの部分を切り取るかを相談した。しかし、結果的に保護者の方から、ドラゴンボール以外の題材で自己表現を行うのがいいのではないかと助言を受けたため、結婚シミュレーションのみで動画をつくることとなった。



結婚シミュレーションは、①親同士の会話、②プロポーズ(失敗→失敗→成功)、③婚姻届の作成、④婚姻届の提出という4部構成で作成した。役者や裏方として他のメンバーの協力が必要だったが、そのキャスティングからオファーまで、T君自身がこだわりを持って決定し進めていった。オファーの結果、T君の彼女役に一般学生、T君の父親役にY君、T君の母親役にHKさん、彼女の父親役に一般学生、彼女の母親役にOさん、役所の人・ナレー

ションにメンター学生が決定した。彼女役のキャスティングに特に苦労し、T君が希望していた方の反応が良くなかったため、脚本の改正を行った。それでもやはり一般学生の感触が良くなかったのと、撮影をしたい日にちょうど欠席していたこともあり、別の一般学生にお願いすることになった。それには少し不満も残っているようで、他の日にも少し後悔を漏らすことがあった。オファーや撮影時のT君は言葉が多くなく、少し素っ気なく感じられる部分もあったが、協力してくれた人たちへの感謝の思いは強そうであったので、気持ちを前面に出しながら会話するのが得意ではないことが感じられた。撮影はT君が考えた脚本をもとに、基本的に2つのアングルのカメラを用いて行われた。それぞれの場面を複数回撮影し、より良い出来のものを用いた。4つの場面を2週かけて撮影した。メンター学生が動画を編集している場面では、しきりに進捗状況を確認しに来る姿が見られた。編集中の動画を見てもらうと、「OK」と素っ気ないものの、嬉しそうな様子が見られた。主人公を演じることや脚本、動画の構成などの中心的なことから、キャスティングや動画のエフェクト、エンドロールの曲選など細かいところまで、T君のこだわりが見られ、随所にT君の一面が詰まった作品となった。作品を準備する最後の日がオンラインでの実施だったので、zoom上で写真を撮り、それをエンドロールで取り入れることになった。

発表当日は、動画を見ているみんなから時折笑顔や笑いが見られ、T君も嬉しそうだった。たくさんの方が協力してくれたことに感謝しつつも、T君のやりたかったことが表現できたようで満足げだった。中心となった学生からは、T君のこだわりが詰まった作品ができたこと、T君のいろいろな面を見ることができて楽しかったこと、T君らしい作品ができたことがふり返られた。

▷ M 君

M くんは、自身の好きなもの話を始めると止まらなくなるタイプであった。ペアの一般学生が「この授業を通してやりたいことは何ですか？」と質問すると、一貫して「(自分の好きなものについて) 伝えること」という返事が返ってきた。そのため、自己表現を形にする過程においては、「ただ好きなものについて伝えること」をいかにして「自己表現の作品」にしていくかが大きな課題であった。その課題と向き合っていく中で、M 君が自身の伝えたいことを文字にして書くことで充実感を得ていることを発見した一般学生は、彼に好きなものについて、とにかく文字に起こすことを促すことにした。そして、M 君自身の好きなものの魅力が詰まった作品を作り、その製作過程までを発表することによって、彼が好きなものについてたくさんの知識を持っていることをはじめとする M 君の自己を表現するのを目標とした。



一般学生は、たくさんある M 君の好きなものの中で、特に今回取り上げるものを、M 君と話し合った上で 5 つに絞った。今回は、野球、スペイン村、だんじり、スキー、乗馬の 5 つを取り上げることとなった。関わる時間が増えたことで一般学生との関係が構築されてきたからか、5 つに絞っていく中で、M 君から「(上記 5 つのうち) 1 つは一般学生さんに作品をつくってほしい」という発言も見られたのが非常に印象的であった。そして、毎週 1 つのテーマについて、M 君が伝えたい、教えたいことを全て、一枚の模造紙に文字で書き起こそうという方針になった。また、熱心に模造紙を作成する M くんの前で、一般学生が M 君に質問をしながら模造紙の内容以外にも発表のネタとなりそうな情報を収集した。実際の発表は、模造紙の内容と収集した情報をもとにナレーション原稿を作成し、それを読む M 君の姿を動画にする、といった内容の予定であった。

しかし、発表の前々週では M 君が授業を欠席し、発表の前の週の授業がオンライン授業に切り替わってしまったために、予定の大幅な変更が強いられた。元は 5 つの好きなものについて発表する予定であったが、今回は「野球」のみ発表することに変更した。また、一般学生は、M 君と相談しながら完成させるはずであったナレーション原稿を一人で完成させ、M 君が発表する動画もオンラインで撮影せざるを得ない状況になり、「一人で作った原稿では M 君の自己表現にならないのではないか」などと苦悩したという。

そんな苦悩の中迎えたオンライン授業、ナレーション原稿を完成させてきたのは一般学生だけではなかった。授業を欠席して連絡が取れていなかったにも関わらず、M 君も原稿を作成していたのである。その授業の中で、M 君が自らの手で書き上げた原稿を基に動画を撮影し、発表当日を迎えることになった。

そんな苦悩の中迎えたオンライン授業、ナレーション原稿を完成させてきたのは一般学生だけではなかった。授業を欠席して連絡が取れていなかったにも関わらず、M 君も原稿を作成していたのである。その授業の中で、M 君が自らの手で書き上げた原稿を基に動画を撮影し、発表当日を迎えることになった。

発表当日、まずは動画を流す前に M 君からの説明が始まった。その内容は、動画内で M 君が発表している内容と全く同じであった。作成した原稿を発表前に勢いあまって読んでしまうところからも彼らしさが伺えた。動画自体は非常に見ごたえのあるものであった。YouTube 風に編集がなされ、これまでに作成してきた模造紙も存分に活用されていた。また、M 君が好きなプロ野球選手を紹介する場面では、画面上に各選手の情報が表示され、一般学生の動画編集における努力が垣間見えた。その後、オン

ライン授業になったことで追加撮影された応援歌を歌唱する M 君の様子が映し出された。メガホンを使用するダンスの振りが完璧であり、一部からは驚嘆の声が漏れていた。M 君の好きが濃縮され、彼らしさが存分に楽しめる動画となっていた。

発表後、ペアだった一般学生は、「M 君が動画を YouTube 風にしたということ、YouTube 風の動画を目指してまとめた。やりたいことは、本当はもっといっぱいあったけれど、今回は好きなプロ野球の球団 1 つに絞ることに。つくってみると、今までのかかわりが要所に出てきて楽しかったです。」と感想を述べてくれた。また、発表の前の週に M 君が作成した原稿の中に、これまでの授業で一緒に話した内容も詰め込まれていたことに嬉しさを感じていた。M 君は、「時間がもっとほしかった、全部歌を歌いたかった。来年リベンジ！」と、実際に歌を歌いたかったと残念な様子を見せていた。

▷ F 君

F 君は肢体不自由の KUPI 学生である。同様に発話も困難であるため、自己表現作品は、F 君を中心として、ヘルパーさん、保護者さん、そしてペアの一般学生をメンバーとして作成された。メンバーが多かったこともあり、作業は順調に進められた。

作品は、「ぼくはくま」という曲の替え歌であった。F 君自身が音楽を聞くことが好き、また音楽を聞いてそれにあわせて身体を動かすことで表現ができることから、音楽を使った自己表現作品を制作することが決まった。また「ぼくはくま」という曲の歌詞には、「歩けないけど踊れるよ シャベれないけど歌えるよ」という部分がありそこに F 君自身との共通項があることから選曲された。それからは、替え歌のため、どのような歌詞にするか、動画に使う写真はどのようなものにするかなどの細かい演出や歌詞の内容について考えていった。

調整を続けていく中で、ペアの一般学生は F 君と同じ時間を長く共有することができたというように述べている。長く同じ時間を共有することで、F 君自身は発話が出来ないけれどもその表情や動きから少しだけ彼の気持ちを読み取ることができるようになった部分もできたと話してくれた。しかし一方で F 君



の自己表現作品において苦戦をした部分もあった。それはその作品が F 君のものなのか、という点である。制作を F 君を中心としたメンバーで進めているとはいえ、彼自身の意志や考えをその自己表現作品に 100% 反映させることができているのか、ヘルパーさんや保護者さん、また一般学生である自分自身の気持ちや考えを表現したものになってしまっていないかという不安が、取り組む間常に心の中にあっただと言う。それでも制作の中で少し読み取ることができるようになった F 君の気持ちなどを少しでも彼の自己表現作品に反映させることができるようにつとめた。

実際に制作を行う段階に移ってからは、メンバーにギターを弾くことのできる一般学生がいたことより、彼のギター伴奏、そしてその他メンバーの合唱が作成された。歌詞は、

F 君についていろいろと色々分かる内容であり、さらに動画に関しても、いろいろな場面での F 君の写真をあつめたスライドショーとなっていた。KUPI での様子だけでなく、ヘルパーさんや保護者さんが家での様子やその他のコミュニティでの様子を写真に撮ってくれていた。他のコミュニティで行われたのであろう誕生日会で喜んでいる様子はとくに印象的で、授業の時のすこし眠そうな F 君とは全く違う様子を見ることができた。

ナレーション、編集に関しても、一般学生と保護者の方で協力して作成されており、ストーリー性のある非常に見ていて楽しい内容になっていた。

【1月25日】

新型コロナウイルス感染拡大第 6 波の影響を受け、この日より対面授業からオンライン授業への変更が余儀なくされた。オンライン授業に不安がある KUPI 学生に関しては、感染症対策をしっかりと実施したうえで、大学内からオンライン授業を受講する運びとなった。

思わぬ事態に、指導教員、コーディネーター、メンター学生は不安でいっぱいであったが、一方で、KUPI 学生たちははじめての体験に非常に興奮していた。とくに印象的であったのが、普段授業においてそれほど積極的に発言をしない S 君と M 君が、オンライン授業に際しては積極的に発言をしていたことだ。非常にいきいきとした様子であった。

授業の形態としては、これまでペアでの活動を基本としてきたので、オンライン授業においても、KUPI 学生の数だけブレイクアウトルームを作成し、ペアに分かれて作業を実施してもらった。ルームの移動等で混乱する KUPI 学生もいたが、保護者の方のサポートや一般学生の声かけ等もあって、なんとか乗り切ることができた。

【2月1日】

自己表現発表会に関しては KUPI 学生からひと言→動画視聴→主に関わった一般学生のコメントという流れで発表が行われた。各人の発表途中にどこからか笑い声やつつこみが飛んでくるような和気あいあいとした状況であった。一方で、「みんなの発表をもっと静かな環境で聞きたかった。」という KUPI 学生の感想もあり、オンラインに不慣れな状況でのオンライン授業の実施は課題も残るものとなった。

発表自体は、どの発表も非常にクオリティが高く、想像以上の出来栄であった。「みんなの知らない面を知ることができてうれしい。またゆっくり全員分見たい。」という声も挙げられた。KUPI 学生/一般学生両方から、非常に満足しているという感想が多く寄せられることとなった。KUPI 学生とのかかわりが一番大きいコーディネーターは、非常に感動した様子を見せていた。

【2月8日】

火曜日の授業の最終回ということで、まず、授業全体を振りかえっての感想を数名の方が述べてくれた。T君は、「火曜日の最終回ということで、自己表現の作品と一緒に作ってくれたメンター学生さん/一般学生さん、ありがとうございました。」と関わったすべての人に感謝の意を伝えた。Y君は「本当はみんなの前でお礼が言いたかった。今回は、オンラインでみなさんにお礼を言います。」と準備した手紙を読んでもらった。苦労したことやよかったこと、学生から言われたこと、コロナへの葛藤など、自分の気持ちの変化や達成感について述べていた。周りの人への感謝とやりがいを感じているようだった。

I君は、作成した作品やつくる上で難しかった点について紹介してくれた。言葉で表すのが難しいとしつつも、ペアで関わってくれた学生に対して、コロナに対する心残りや感謝を述べていた。ラハプのラップに思いを巡らす場面もあった。Iさんは「いろんなことが学べて楽しかったです。」とノートに書いて示してくれた。

HKさんは、関わってくれた一般学生やメンター学生、KUPI学生に対して感謝を述べていた。自身の自己表現の動画を今も見返すようで、特に動画の編集をしてもらったKUPI学生に対して、手話歌ができるようになったことや、隣で一緒にできたこと、編集をしてもらったことに対して喜びを語っていた。大きな達成感を得られたようだった。

N君は、他のKUPI学生の感想を聴く態度を問題視しつつ、いろんな人たちと出会って、表現活動ができたことにやりがいを感じているようだった。KUPIを守りたいという熱い思いも述べてくれた。HHさんは、一緒に帰るときのメンバーや、褒めてくれたメンター学生に対して感謝を述べていた。出会えてよかった、一緒に帰ることができ嬉しかったと伝えていた。Mさんも、zoomのチャット上で、サポートしてくれたペアの一般学生や、一緒に発表を行ったHKさんへの感謝を伝えていた。

2) 水曜日プログラム「よりよく生きるための科学と文化」

【水曜日プログラムの趣旨】

- ・「よりよく生きるための科学と文化」を柱に、人間と生活、社会、自然、文化といった視点で構成した。
- ・神戸大学の教育学、哲学、音楽学、自然科学、心理学、保健学、経済学を専門にする教員による特別授業として実施する。(協力いただく教員とその授業内容については別紙)

【プログラムに取り組む基本スタンス】

- ・KUPI での学びは、「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」と名付けているように、学生が楽しく学べることを大切にする。
- ・神戸大学の教員の協力を得て、大学での学びにふさわしく質的にレベルを落とすことなく学べるように工夫する。つまり、むずかしいことを障害のある学生にもわかりやすく教えてもらうこと。

【授業する上でお願いした留意事項】

- ①一人2回連続の授業を基本とする。
- ②KUPI 学生が知的障害青年ということを配慮して、授業の進行はゆっくりとしたテンポを心がけること。内容量は少なくてもよい。
- ③授業をするにあたってはシラバスを作成すること。シラバスは KUPI 学生に配布をするがメンター学生など関係者の共通理解のツールでもあるため、この事業の資料としても活用する。
- ④KUPI 学生にわかりやすくするために、パワーポイントを使用するなど、視覚的にわかりやすくする。(ただし、文字にルビを打つことは基本的には必要ない。)あわせて、授業の資料をレジュメにして配布すること。簡単なものでよい。
- ⑤専門用語や聞き慣れない言葉を使用する場合は、できるだけわかりやすく解説するなど工夫をお願いしたい。
- ⑥授業には基本、KUPI 学生2～3人に一人のメンター学生がつく。メンター学生は授業が理解しやすいように丁寧に支援するので、安心して協力を要請してほしい。
- ⑦「新型コロナウイルス感染拡大防止のための神戸大学の活動制限指針」に従って、オンラインで授業をする場合がある。その際には協力をお願いする。

【KUPI 学生をサポートする上で気を付けたこと】

- ・授業前にコーディネーターが担当教員に授業の進め方を確認し、メンター学生に伝えることで流れを共有した。
- ・授業後のふり返りでは、コーディネーターの河南氏が進行する内容をメンター学生がホワイトボードに書いて、視覚的にもふり返りやすい環境を作った。
- ・グループディスカッションを取り入れることで発言しやすい環境を作り、発表の機会を増やした。

【水曜日プログラムの授業計画】

- (1) 「人間と発達」 赤木 和重准教授
 - ①10月6日 コミュニケーション①「自己紹介」
 - ②10月13日 コミュニケーション②「共同お悩み相談」
- (2) 「よりよく生きるためのてつがく」 稲原 美苗准教授
 - ①10月20日 「幸せとは何か」
 - ②10月27日 「愛とは何か」
- (3) 「人間生活と言語表現」 川地 亜弥子准教授
 - ①11月10日 人はなぜ書くのか その1
 - ②11月17日 人はなぜ書くのか その2
- (4) 「身体を動かそう」 喜屋武 享助教
 - ①11月24日 様々なドッジボール
- (5) 「宇宙の科学」 伊藤 真之教授
 - ①12月1日 星の一生とブラックホール
 - ②12月15日 生命を宿す“星”を探す
- (6) 「フェルトパンチャーを使って」 神戸大学附属特別支援学校 柴田真砂代教諭
 - ①12月8日 フェルトで作るミニマット
- (7) 「音楽表現活動を体験しよう！」 岡崎 香奈准教授
 - ①1月12日 音楽の作用について
 - ②1月26日 楽器を使った音楽表現、替え歌
- (8) 「私たちの人権としての社会保障」 井口 克郎准教授
 - ①1月19日 憲法と社会保障

「人間と発達」 講師：赤木 和重准教授

〈テーマ〉 インプロというコミュニケーションを学ぼう！

〈概要〉 ・できることとできないことで自己紹介をしよう

- ・できないからこそできることってなんだろう？
- ・共同お悩み相談をしよう

〈内容・1回目〉

(1) 赤ちゃんのコミュニケーションに関する動画視聴

赤ちゃんが周りの人物の言動を模倣している様子を撮影した動画を視聴した。赤ちゃんは会話や言葉の内容はわかっていなくても、周囲を見て真似をし、楽しそうにしていた。大学教員が KUPI で大切にしたいことである、「よくわからんけどノリにのってみることに通ずるものがある。

(2) 自己紹介

自己紹介シートに、自分が「できること・得意なこと・好きなこと」と、「できないこと・苦手なこと・嫌いなこと」を書いた。これを用いて自己紹介する。

(3) 絵本『みえることやみえないことや』

絵本をスクリーンに投影し、大学教員が読み聞かせを行った。

(4) できないからこそできること

最初に、グループ内で自己紹介シートに書いたことを発表しあい、お互いに「違うところ」を探した。次に、グループ内の他の人の「できないこと・苦手なこと・嫌いなこと」に関して、「できないからこそできること」を探した。大学教員が出した例は、「片付けができないからこそ、部屋にいろんなものがあるってワクワクする」など。

〈内容・2回目〉

(1) 役に立たないロボットに関する動画視聴

構造的にゴミを拾うことができないゴミ拾いロボットについての動画を視聴した。動画内には、面白がってロボットの周りを歩き回る子どもや、ロボットのゴミ拾いを手伝ってあげる人が登場した。役には立たないが、面白さはあるロボットであることがわかった。

(2) 赤ちゃんのコミュニケーションに関する動画視聴

お母さんと、お母さんに抱っこされた赤ちゃんが見つめあっている動画を視聴した。赤ちゃんとお母さんは見つめ合うことでコミュニケーションをとっている。赤ちゃんは何もできない（自力で動き回ることができない）からこそお母さんと見つめ合いやすくなり、コミュニケーションが取りやすくなっている。できることが多いのはいいことだが、この赤ちゃんのように、できないからこそいいこともある。

(3) 共同お悩み相談

自己紹介シートの「できないこと・苦手なこと・嫌いなこと」から一つ選び、グループに相談する。相談された人は①解決するための方法、②解決しなくてもいい理由、の2つの視点から考えて意見を述べる。相談内容について、グループごとにみんなの前で発表した。

〈授業を振り返って〉

(1) できないことを伝える勇気と、互いに受容する空気

最初の自己紹介シートには「できること・得意なこと・好きなこと」、「できないこと・苦手なこと・嫌いなこと」を書く欄があった。多くの KUPI 学生は「できること・得意なこと・好きなこと」はすらすらと筆を進めていたものの、「できないこと・苦手なこと・嫌いなこと」では少し止まってしまうような姿が見られたように思う。「嫌いなこと」はたくさん書いても、「できないこと」は書かないような KUPI 学生もいた。ある程度親しい間柄になっても、自分の「できないこと」を伝えるのは大変難しいことであると捉える人は多いのではないだろうか。

しかし講義後半部分の共同お悩み相談では KUPI 生は皆何かしらの悩みやできな

いことをグループの人に相談していた。これは赤木准教授の、動画や絵本を取り入れた、KUPI 学生の興味を惹きつけるような授業内容や、柔らかく、互いを受容し合うような雰囲気の影響があったためではないだろうか。

(2) 発想の転換の難しさ

「できないからこそできること」を考える、というお題が予想以上に難しかった。「できないこと」は治すべきである、という考え方があるからなのか、「片付けができない」というと部屋の片付け方を教えてくれる KUPI 学生もいた。これは KUPI 生のこれまでの人生経験に加え、自分の意見を柔軟に変更することが難しいからなのではないかと考えた。「できないこと」も受け入れ、「できないからこそできること」を探すことは、より一層受容の雰囲気を強めることにつながると考えられる。互いに認め合ったり、様々な人に出会って新たな価値観を得たりすることで、このようなより柔軟な思考ができるようになることを願う。

「よりよく生きるためのてつがく」 講師：稲原 美苗准教授

〈テーマ〉「幸せ」「愛」について考える

〈概要〉・「幸せ」「愛」をテーマに、みんなで哲学対話を楽しもう。

- ・身近な経験をもとに、「幸せ」を哲学的な視点から考えてみよう。(第1回)
- ・「愛」とは何かを考えた上で、愛する人にラブレターを書こう。(第2回)

〈内容・第1回〉「幸せ」とは何か？

(1) あなたにとっての「幸せ」とは？

始めに、自分にとっての「幸せ」とは何かということについて、スマートフォンの絵文字を使って表現する活動に取り組んだ。KUPI 学生たちは、スマートフォンの絵文字を見ながら、「絵文字は選べたけれど、この気持ちは言葉では説明できない」「好きな人と手をつなぐときが幸せだけれど、どんな絵文字で表したら良いか」など、「幸せ」について真剣に考えていた。



(2) アランとラッセルの幸福論

一人一人が「幸せ」について考えた後、アランとラッセルの幸福論について説明があった。

① アランの幸福論

アランは、幸せになるためには「身体の健康」と「苦勞」が必要であるとし、自分が幸せであることが他者も幸せにすると述べた。抽象的な話が続いたが、大学

教員の話に熱心に耳を傾け、レジュメに下線を引いている KUPI 学生も見受けられた。

② ラッセルの幸福論

ラッセルは、幸せになるためには「退屈と気晴らし」が大切だと述べたという話をもとに、具体的に私たちの「気晴らし」は何かということについて議論した。

「カラオケに行くこと」「お酒を飲むこと」「好きな芸能人の写真を見ること」など、KUPI 学生、メンター学生からたくさんの意見が出た。

(3) 心を乱さないためには—ヒルティの幸福論をもとに議論する—

哲学者ヒルティは、「苦しんでいても、変わらない強い意思を持つことが幸せにつながる」と述べた。このことを踏まえ、「心を乱さないためにはどうしたら良いか」というテーマでディスカッションを行った。M さん、O さん、Y 君のグループでは、「嫌なことを思い出さない」「楽しいことを考える」といった意見が出た。その上で、「信念を貫き、自分らしさを大切にすること」が、心を乱さないために必要であると結論づけていた。抽象的な話を具体的な行動レベルに落とし込んで考えた上で、「自分らしさ」という抽象的な結論に達していたのが興味深いと感じた。

〈内容・第 2 回〉「愛」とは何か？

(1) 愛には 3 つの区分がある

「私はポテトチップスを愛している」「私は思索を愛している」「私はマイキー(夫)を愛している」という 3 つの例文を引き合いに、愛にはエロース、アガペー、フィリアの 3 つの区別があることを学んだ。エロースは情熱的な欲求、アガペーは無償の愛、フィリアは友愛であるとした上で、これら 3 つの区別は曖昧であることが説明された。

(2) 新しい愛の意味を求めて

上記の考え方では愛を説明できないとして、20 世紀から新しい愛の理論が構築されていった。本講義では、「融合」「関心」「評価」「感情」の 4 つに焦点を当てた。

ここまで抽象的な話が続き、難しさを感じている KUPI 学生も多かった。しかし、「愛」は多くの KUPI 学生にとって関心のあるテーマだったようで、レジュメを真剣に見つめ、話を理解しようとしている KUPI 学生が多い印象を受けた。

(3) あなたにとっての「愛」とは？—グループディスカッションで学び、深める—

「愛」について哲学的に考えた上で、自分にとっての「愛」は何かということについてグループディスカッションを行った。ディスカッションは、「誰に向けての愛か」「なぜその人を愛しているのか」と段階的に進むよう設定されていたため、KUPI 学生が無理なく取り組むことができていた。

I 君、M 君、T さんのグループでは、「応援したいから、友達」「いっぱいゲームの話ができるから、メンター学生」「YouTube で見て会いたい気持ちが止まらなくなるから、ジャニーズ」といった意見が出ていた。このグループでは、ただ単に自分の意見を発表するだけではなく、他の人の発表を聴いて「うんうん」とうなずいたり、「分かる！」

「いいね！」とコメントしたりなど、KUPI 学生同士が相互的にやりとりを行っていた。「愛」という興味のあるテーマだったからこそ、KUPI 学生がお互いに興味を持って話を聴き合うことができたのだろう。

(4) 愛する人にラブレターを書こう

グループディスカッションを踏まえ、思い思いの人にラブレターを書いた。どの KUPI 学生も真剣な表情で便箋に文字を書き連ねていた。書いた後は、みんなに向けて発表した KUPI 学生もいれば、便箋に封をして大切そうにカバンにしまった KUPI 学生もいた。



〈考察〉

(1) 「具体的な学び」と「抽象的な学び」

本講義は、第 1 回では「幸せ」を絵文字で表すという具体的な活動から、哲学者の幸福論について学ぶという抽象的な学修を行った。対して第 2 回では、「愛」について哲学的に考察した上で、身近な人に対してラブレターを書くという具体的な活動に取り組んだ。すなわち、前者は「具体的→抽象的」、後者は「抽象的→具体的」という対極的な進め方だった。この 2 つの講義を KUPI 学生とともに受講して感じたことが 2 つある。

1 つ目は、具体的な活動から始めることで、KUPI 学生の主体性が生まれ、抽象的な学びへと移行しやすくなるということである。「幸せ」を絵文字で表すという活動は、日頃からスマートフォンを使用している KUPI 学生にとっては考えやすいテーマであり、メンター学生のサポートを受けながら、自分であれこれと考えることができていた。また、この活動が「幸せ」について考える土台となり、後の抽象的な講義でも、レジュメに下線を引きながら熱心に聞こうとする KUPI 学生の姿が見受けられた。

2 つ目は、抽象的な学びは、具体的な活動をより豊かにするということである。第 1 回の講義でヒルティの幸福論をもとに議論を行った際は、大学教員の抽象的な話を具体的な話に落とし込み、KUPI 学生同士で議論を交わすことができていた。また、「愛」についての講義をもとにラブレターを書いた際は、一人一人が真剣な表情で文章を考えている姿が印象的だった。



「知的障害のある KUPI 学生にとって、抽象的な学びは難しいのではないか」という意見もあるだろう。しかし、以上のことを踏まえると、KUPI 学生の学びを深めるためには、具体的な学びも抽象的な学びも必

要であるといえる。KUPI 学生が興味、関心を持つことのできる題材で、具体的な学びと抽象的な学びをうまく織り交ぜていくことが重要であると考える。

(2) グループディスカッションの重要性

本講義を通して、KUPI 学生の学びを深めるためには、KUPI 学生とメンター学生によるグループディスカッションが重要な役割を果たすということを実感した。大学教員の話聞く時間はもちろん大切であるが、講義中に分からないと感じたところをメンター学生に質問することができない KUPI 学生がいたり、そもそも「何が分からないかも分からない」という状態に陥っている KUPI 学生もいたりする。

しかし、そのような KUPI 学生でも、グループディスカッションで他の KUPI 学生やメンター学生の意見を聞くことで、自分の意見を話せるようになることが多い。例えば O さんは、第 1 回の講義中に「先生の話していること、分かる？」と尋ねると、「何を言っているのか全然分からない」と話していた。しかし、「心を乱さないためにはどうしたら良いか」というテーマでグループディスカッションを行った際には、他の KUPI 生の意見を聞きながら、「家族とか友達とか、他の人を頼ったら良いと思う」と、自分の意見をしっかりと口にしていた。

このように、同じ立場の KUPI 学生やメンター学生と話し合う時間を設けることで、大学教員の話を理解するきっかけをつかむことができたり、自分の意見を述べる機会を作ったりすることができる。ゆえに、KUPI 学生の学びを深めるために、グループディスカッションを有効活用する必要があるといえるだろう。

「人間生活と言語表現」～人はなぜ書くのか～ 講師：川地 亜弥子准教授

〈テーマ〉「人間生活と言語表現 人はなぜ書くのか」

〈概要〉・人はなぜ書くのか考えよう

- ・みんなと一緒に書いてみよう
- ・作品を読み合って、感想を交流しよう

〈内容・第 1 回〉

(1) 「私は」作文での自己紹介

川地先生から「私は～」から始まる文章での自己紹介があり、川地先生の地元の写真で大変盛り上がった。この自己紹介で、教室の空気が一気に温かくなった。

(2) 今回取り組む作文について

① 目的がはっきりしている文章の書き方—コンポジション理論による文章構成法—

文章を書くにあたって、「主題を決める→計画を決める→草稿を書く→推敲をして書きなおす」という一連の流れがある。主題を決める段階では、何を書くかを決めるが、それを決める際には書き手の関心や読み手の関心、分量といったことを考える。そして、計画を決める段階では、材料の選択や整理・配列、流れ(アウトライン)の作成が行われる。

②今回取り組む作文は、もっと自由なもので

①が文章を書くにあたっての基本的な流れであるが、今回は少し違って、「生活綴り方・自己表現としての作文」を学生には書いてもらう。そのときに大切にしてほしいことは二つある。一つ目は、「書きたいことを、書きたいように、書きたいだけ書く」ということだ。作文のテーマも長さも自由である。そして二つ目は、「みんなで読むことを大事にする」ということだ。書いたら書きっぱなしではなく、「書く・読む・話し合う」のサイクルを行う。

③作文の紹介

家族のことを書いた作文と好きなことを思いっきり書いた作文が紹介された。どちらも聴いていて微笑ましくなる作文であり、KUPI 学生もこの作文を聴きながらニコニコ微笑みながらも、自由な作文のスタイルを感じ取ってくれたのではないかと思う。

(3) Expressive Writing (生活綴り方) にチャレンジ!

『私の好きな○○(ものでも、人でも、遊びでも、何でも OK)』『私の家族』『コロナで気づいたこと、コロナが落ち着いたらしたいこと』『その他(自由)』の中からお題を選んで、作文を書く。その作文には自分ですてきな「題」をつける。



(4) 作文を読み合う

みんなで読んでもいいよ! という人は○の中に○を書き、ぜひ読んでほしい! という人は◎を書く。それを司会の人(川地先生、またはメンター学生)に見せて、それに応じて読み合う。KUPI 学生とメンター学生を半分に分け、半分は教室の前のホワイトボードの前で、もう半分は教室の後ろで集まって発表する。一人が読み終わるたびに、聴く側が「質問」と「いいなあと思ったことを発表する」という時間を設ける。相模女子大学から来た学生さんもお自身の作文を披露して下さった。

〈内容・第2回〉

(1) 書くということ

①書くことは自分を見つめること

書くことで、人は過去のことを思い出し、心の中でもう一度経験する。また、書きながら理解し、整理していく。そして、楽しい経験・好きなことは、書きながらまた楽しくなるものだ。

②学校における「書く」道具の変化

昔の文房具は、低学年では石盤・石筆、中学年以上では和紙・毛筆が使われ、自由に気軽には書きにくかった。そこから時代は変化し、100 年前ごろには、それらが鉛筆と紙に替わり、自由に気軽に書けて、失敗しても書き直せるようになった。つまり、「書きたいことを、書きたいように、書きたいだけ」書けるようになったのだ。また、謄写版

で印刷もできるようになり、学習者で「本」をつくり、みんなで読み合えるようにもなった。そして、今もまた子どもたちの学習におけるタブレットの導入などによって、「書くこと」の形に変化がもたらされつつある。

(2) Expressive Writing(生活綴方)にチャレンジ!

今回のお題は、『KUPIに来るようになって変化したこと』『その他(自由)』である。20分ほど時間をとり、各々で書き進めた。

(3) 作文を読み合う

先週の、読み合う際に互いの声が聞こえにくかったという反省点を生かして、今回は部屋を二つ用意し、グループで一つずつ部屋を使って、発表会を行った。



〈考察〉

(1) 積極的に作文を披露する KUPI 学生

作文を書くことに苦労している KUPI 学生もいたが、比較的みんな作文を書くのが好きだ。そう思えたのは、みんなで書いた作文を読み合う場面であった。いつもは発表しない子が、「読んでもいいか」を尋ねる四角の枠に○と書き(◎を越えて花丸を書いている人もいた)、二枚にわたって作文を書いていた。このように積極的にみんなの前で自分の作文を読みたいという気持ちになれたのは、発表するか否かを言葉で言うのではなく、○や◎で表現できたことや、KUPI 学生とメンター学生を半分に分けて、いつもより少ない人数で読み合ったことといった発表形態の工夫が理由として考えられる。しかし、KUPI 学生の様子を見ていると、それだけではないように思えた。素直に、「自分のことを知ってほしい」という思いの強さではないかとも思う。そして、その思いを受け入れてもらえるというその場の安心感がより彼らの発表を後押ししてくれたのではないかと感じた。

(2) 作文を読み合う中で生まれる他者への興味・関心

1回目から2回目にかけて、KUPI 学生に変化があった。ここでは2人を紹介したい。まずは、M君。彼が1回目に書いた作文は自分の好きなこと言葉で埋め尽くされており、文章になっていなかった。川地先生は必ず文になっていなくても、絵でもよいとお

っしやられており、メンター学生やコーディネイターも彼の好きなことに対する熱量は去年から知っていたため、特に何も言うことはなかった。しかし、2回目の授業では、彼は単語を組み合わせて、文章を書いてきたのだ。1回目と2回目の間に彼に何がおこったのだろうか。ただ、文章を書く気分だっただけかもしれない。しかし、私は1回目の作文の読み合いが彼に大きな影響を与えたのではないかと感じた。「自分の好きなことを、他者意識をもって伝える」という意識が彼の中に芽生えたのではないだろうか。次は、I君。I君は文章を書くことが得意ではない。そして彼は他のKUPI学生やメンター学生に自ら話しかけることはあまりない。黙々と真面目にいつも「書くこと」と闘っている。そんな彼がふと、何について書こうか迷っている隣のKUPI学生を見て、「自分と同じだな(書く内容を迷っている)。」とつぶやいた。これもM君と同様、意識して言ったことではないと思う。ただ、彼のその言葉を聞いて、書いた内容だけでなく、その過程においてもこのように共感できるということ。そして共に書き、読み合うことの意義を感じた瞬間であった。

(3) 「書く」ということ

本講義では、メンター学生も一緒になってKUPI学生と作文を書いたが、KUPI学生から学ぶことは多かった。例えば、2回目のKUPIについてのお題のとき、KUPI3年目のN君は書くことが思いつかなかった。そして彼は、「2年前のKUPIの教室に行きたい」という思いをメンター学生に伝え、メンター学生と共にその教室に向かった。彼はその教室に着くなり、その時の思い出をたくさん語ってくれ、涙を流した。そして、彼はもとい教室に戻ってきて、自分の楽しかった思い出をつらつらと書いていったのだ。私には、書けないとき自分が書きたいことに関連する場所に行ったり物を見たりするという考えがなかった。それを思いつき、実際に行動に移したのちに書いた彼の一文一文は、表面的では決してなく、彼の思い全てがのっていると感じ、「書く」ということの意味を改めて考えさせられる場面であった。

「身体を動かそう」 講師：喜屋武 享助教

〈テーマ〉 フリスビーを使ったリスクドッチ

〈概要〉 ・様々なドッチボールのルールを知ろう。

- ・ドッチボールをプレイしてみよう。
- ・ドッチビーをプレイしてみよう。

〈内容〉

(1) 世界のドッチボール

始めに、様々なルールのもとでプレイされるドッチボールの動画を視聴した。日本でよく行われているドッチボールは、使用されるボールの数は1個であり、各チームが内野と外野に分かれている。しかし、動画の中の他国で行われているドッチボールでは、ボールが複数個使用されていたり、外野が存在しなかったりした。また、近年新しく作られたものでは、トランポリンのフィールド上でドッチボールを

行うようなものもあった。

スポーツのルールは絶対的なものではなく、その場にいる人々が楽しめる範囲で変更することができる。スポーツのルールは、時代や人々の意識、社会の変化によって変容するということがわかった。

(2) ドッチボールをプレイしてみよう

2チームに分かれ、ドッチボールの試合を行った。ルールは6つあり、①それぞれのチームで内野と外野に分かれる、②内野の人は4隅のコーンの中でのみ行動する、③内野の人はボールに当たったら外野に出る、④外野の人は相手チームの内野の人にボールを当てると、自チームの内野に戻ることができる、⑤ボールは1個使用、⑥ボールは両手で持って投げる、である。途中からはボールを増やし、ボールを2つ用いて試合を行った。

(3) 王様ドッチをプレイしてみよう

次に、王様ドッチを行った。チーム内で一人王様を決めてドッチボールを行い、相手チームの王様にボールを当てたチームが勝つというルールである。王様のみがビブスを着用する。2試合行い、試合ごとに王様を交代した。

(4) ドッチビーをプレイしてみよう

最後に、ドッチビーの試合を行った。正式名称はディスクドッチ。ボールの代わりにフリスビーを使ったドッチボールである。柔らかいフリスビーを使用した。3試合目からは、試合時間が1分経過するごとにフリスビーの数を一つずつ増やすというルールで試合を行った。

〈授業を振り返って〉

(1) 動画の視聴

授業の最初に様々なドッチボールに関する動画を視聴した。動画を視聴することは視覚効果もあり、理解を促すものである。実際、多くの KUPI 学生は興味を持って視聴し、自分が知っているドッチボールと世界のドッチボールとの違いに驚いたり、トランポリンドッチボールに期待を膨らませたりしていた。一方で、動画の視聴の仕方には気を配る必要があると感じた。KUPI 生の中には聴覚過敏だったり、音が聞こえにくかったりする人もいる。冒頭の動画に集中できないことは、その後の授業への参加態度にも影響すると考えられる。聴覚以外にも、参加する人の特性などを考慮し、より動画に集中し、多くの学びを得ることができるよう配慮するべきであると感じた。

(2) スポーツの経験の違い

今回の授業はドッチボールを主軸に展開されていた。ドッチボールは学校などでよく行われている、日本人にとって馴染み深いスポーツである。しかし、KUPI 学生の中には、ドッチボールのルールを十分に理解していない人もいた。これまでドッチボールを行う機会が少なかったり、全くなかったりしたのだと考えられる。また、

過去にドッチボールやスポーツに関して嫌な思い出があり、苦手意識を持っているような KUPI 学生もいた。

このように、スポーツに関する経験や意識は人によってそれぞれ違う。そのため、その場にいる全ての人を楽しめるよう、配慮する必要がある。今回の授業では、ボールの投げ方に関して配慮がなされていた。ボールを投げる際は両手で持ち、頭の上から投げるというルールがあったおかげで、これまでのドッチボールで怖い思いをした KUPI 学生も活動に参加することができた。一方で、ドッチボールの基本的なルールに関しては十分な説明がなく、ドッチボールの経験がない KUPI 学生が戸惑っているように見受けられた。このことから、自分の価値観や知識を見直し、それがその場にいる相手と共有されているかどうかを確認する必要があると感じた。

(3) スポーツを通じたコミュニケーション

ドッチボールのチーム分けは KUPI 学生たち自身に委ねられていた。女子はコーディネイターに決めてほしいという意見もあったが、最終的にはメンター学生の提案のもと、グーパージャンケンで決めることになった。KUPI 学生の中には、グーパージャンケンを経験したことがない人もおり、新たな集団活動の形を体験することができた。

王様ドッチではチーム内で作戦を練っている姿が見られた。身体を動かす活動でやるべきことが分かりやすかったためか、あるいは試合に勝ちたいという思いが強かったためか、他の授業でのグループワークの時よりも KUPI 学生同士の会話が弾んでいたように思う。積極的に他の人に話しかけたり話を聞いたりし、間を取り持つような役割をしていた KUPI 生がいた影響も大きいと考えられる。チームスポーツを通じて、普段とは違うコミュニケーションの取り方が行われているように感じた。一方で、通常のドッチボールやドッチビーでは、自分が投げたボールが人に当たったかどうかや、うまくフリスビーを投げられたかに意識が向き、チームとして戦っている KUPI 学生は少なかったように見受けられた。また、興味はあっても活動にうまく参加できていない KUPI 学生もおり、メンター学生によるサポートが必要であった。このことから、KUPI 学生同士のコミュニケーションづくりには場づくりが大切であること、またその場づくりとして、王様ドッチのような、チームで協力する必要のあるスポーツが有用であることがわかった。

「宇宙の科学」 講師：伊藤 真之教授

〈テーマ〉宇宙の科学

〈概要〉・現代の科学が描く宇宙の姿について学ぼう。

- ・星の一生とブラックホールについて学ぼう。(第1回)
- ・生命を宿す“星”の謎に迫ろう。(第2回)

〈内容・第1回〉星の一生とブラックホール

(1) 宇宙を視覚的に知る

始めに、宇宙の全容を捉えるために動画を視聴した。エベレストを出発点としてどんどん地球から遠ざかり、宇宙の全体図を捉えた上で、また地球へと戻っていく動画だった。宇宙の広さが視覚的に分かる映像となっており、KUPI 学生は食い入るように画面を見つめていた。

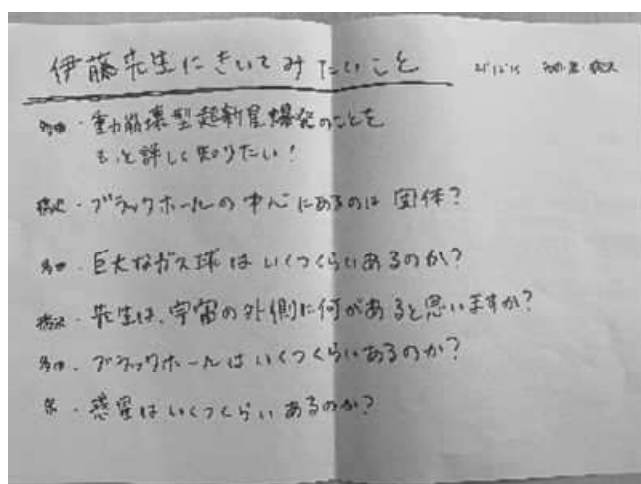
(2) 星はどのようにして生まれ、一生を終えるのか

次に、星のでき方について、パワーポイントを用いての説明があった。宇宙の塵が重力の影響で中心に集まって新しい惑星ができる様子や、寿命を迎えた星が重力で潰され、跳ね返る力が超新星爆発を引き起こす様子などについて説明があった。

講義は、スライドに実際の写真を多く掲載したり、文字だけではなく図やイラストも交えて説明したりなど、KUPI 学生が視覚的に理解できるように工夫されていた。しかし、参照できるレジュメが手元になく、何を話しているかが分からないと訴える KUPI 学生もいた。

(3) 質問したいことをまとめる

講義の内容を踏まえ、KUPI 学生とメンター学生が宇宙に関して抱えている疑問について、グループディスカッションを通してまとめた。O さん、Y 君のグループでは、宇宙に興味のある Y 君を皮切りに、「ブラックホールの中に吸い込まれたものはどこへ行くの?」「なぜブラックホールは円盤状になるの?」「地球温暖化と宇宙は関係ないの?」など、たくさんの質問が出た。全体的に宇宙に関心のある KUPI 学生が多く、どのグループでもたくさんの質問が出ていた。



〈内容・第2回〉生命を宿す“星”を探す

(1) 地球のような星を探すーハビタブル・ゾーンー

「地球以外に生命は存在するか」という問いの答えを見つけるためには、地球と同じような環境を持つ星を見つける必要があるということを学んだ。また、そのためには、液体の水が存在し、生命が生存できる可能性がある領域「ハビタブル・ゾーン(居住可能領域)」に着目する必要があることも学んだ。

大学教員が「ハビタブル・ゾーンが今日の講義のキーワード」と話していたことも

あり、講義後の振り返りでハビタブル・ゾーンについて言及している KUPI 学生が見受けられた。

(2) ケプラー衛星とブレイクスルー・スターショット計画

ハビタブル・ゾーンに存在する太陽系外惑星を探すために、ケプラー衛星やブレイクスルー・スターショット計画があることを学んだ。衛星の写真や実際に見つけた惑星の候補、レーザー光で飛んでいく超小型宇宙船の動画など、視覚的に引きつけられる情報がたくさんあり、意欲的に話を聞いている KUPI 学生が多い印象を受けた。



(3) 質疑応答コーナー

最後に、第1回の講義後にみんなで出し合った疑問に対して、大学教員から解説を受けた。「ブラックホールはいくつあるの?」「流星群はどうやってできるの?」などたくさんの質問に丁寧に答えてもらえた。また、「宇宙の外には何があるの?」という問いに対しては、「宇宙はどこまでも広がっていると思うので、そもそも「外」という概念がない」という抽象度の高い回答をいただいたが、図で表したりメンター学生に質問したりしながら理解しようとしている姿勢が見受けられた。



自分たちの疑問に答えてもらえる嬉しさから、うんうんとうなずきながら聞いている KUPI 学生、聞いた内容をノートやレジュメにまとめている KUPI 学生が多くいた。その反面、自分がどんな疑問を抱いていたのかを思い出せず、他人事のように聞いている KUPI 学生もいた。グループディスカッションの際に、誰の質問かが分かるように、質問の横に名前を併記する必要があったかもしれない。

講義終了後の振り返りでは、2回の講義を通して分かったことや分からなかったこと、質問をグループディスカッションでまとめた。講義が終わった後でも、KUPI 学生からたくさんの質問が出ていたことが印象的だった。

〈考察〉

(1) KUPI 学生にとって「宇宙」というトピックは…?

2回の講義を通して、宇宙に対して興味、関心を持っている KUPI 学生がたくさんいることが分かった。講義中、Y 君を筆頭に大学教員に直接質問する KUPI 学生や、グループディスカッションの際に気になることをたくさん挙げる KUPI 学生が多くいた。また、宇宙についての動画を視聴した際に、画面を真剣に見つめる KUPI 学生の姿が印象に残っている。

このように、宇宙に興味を持ち、積極的に講義に参加する KUPI 学生がいた反面、宇

宙に興味を持たない KUPI 学生も一定数見受けられた。そのような KUPI 学生は、大学教員が一方的に話し続けていたことも影響して、講義への参加が受動的になっていた印象を受けた。詳しくは次項で考察するが、KUPI 学生が主体的に講義に参加できるようにするためには、自身の意見をアウトプットする機会が必要であると感じた。

(2) 双方向のコミュニケーションが生まれる講義へ

KUPI 学生が主体的に講義に参加できるようにするためには、大学教員と KUPI 学生との双方向のコミュニケーションが必要である。質疑応答の時間を設けたことで、宇宙に興味のある KUPI 学生が積極的に質問し、学びを深めることができていた。また、宇宙に興味のない KUPI 学生も、グループディスカッションの際にはメンター学生の支援を受けながら宇宙について考え、疑問点を挙げるができていた。

このように考えると、質疑応答の時間だけでなく、通常の講義の中でも、大学教員と KUPI 学生がやりとりすることのできる機会を設けることが重要だといえるだろう。例えば、講義の初めに「星はどうやってできると思いますか?」「宇宙人はいると思いますか?」といった問いを投げかけるだけでも、KUPI 学生が少し立ち止まり、自分なりの答えを考える時間を作ることができる。このような小さなやりとりを挟むことで、興味のあるなしにかかわらず、KUPI 学生が主体的に取り組むことのできる講義が作られていくのではないだろうか。

「フェルトの日常小物作り-『フェルトパンチャー』を使って-」

特別外部講師：柴田 真砂代教諭（神戸大学附属特別支援学校教諭）

<概要>

特別外部講師を招いて、フェルトや羊毛を使用した小物作りを行った。作業は「型紙を作る→型紙に沿ってフェルトを切る→フェルトパンチャーを用いてフェルトや羊毛を接着させていく」という手順で行った。フェルトパンチャーとは羊毛フェルト手芸のための道具で、長く太めの針に持ち手が付いたものである。フェルトや羊毛といった素材を重ね合わせ、その上からフェルトパンチャーでプスプスと刺していくことで素材の繊維が絡まり、接着剤が無くても素材同士が接着していく、という仕組みとなっている。



フェルトパンチャー

<授業の様子>

KUPI 学生は作成する小物の種類（例：コースター、壁飾り）やデザインを事前に考えてきており、その構想をもとに、講師や大学教員、メンター学生らの助けを借りながら思い思いの小物を制作した。実施日が12月ということもあり、クリスマスツリーやトナカイをデザインした作品やクリスマスツリーの飾りを制作する者や、神戸大学図書館のマスコットキャラクターである「うりこ」、大人気漫画のキャラクターをモチーフにした作品を制作する者もいた。仕上がった作品はどれも個性豊かであり、KUPI 学生それぞれの大切なものや好きなものを想う気持ちが垣間見える時間となった。



水曜プログラムではいわゆる講義形式の授業が多かったため、普段とは違う雰囲気の中での授業となった。その中で KUPI 学生とメンター学生が協力して作品を仕上げていく様子からは、障害の有無や KUPI 学生・メンター学生という立場を超えた関係性を構築していることが窺えた。

どんなデザインにしようかな

<振り返りから>

KUPI 学生からは、「楽しかった。またやりたい」「最初は手間取ってあまりうまくできなかったけど、（講師や大学教員、メンター学生らの）サポートのおかげで作品ができて良かった」といった感想が挙がった。

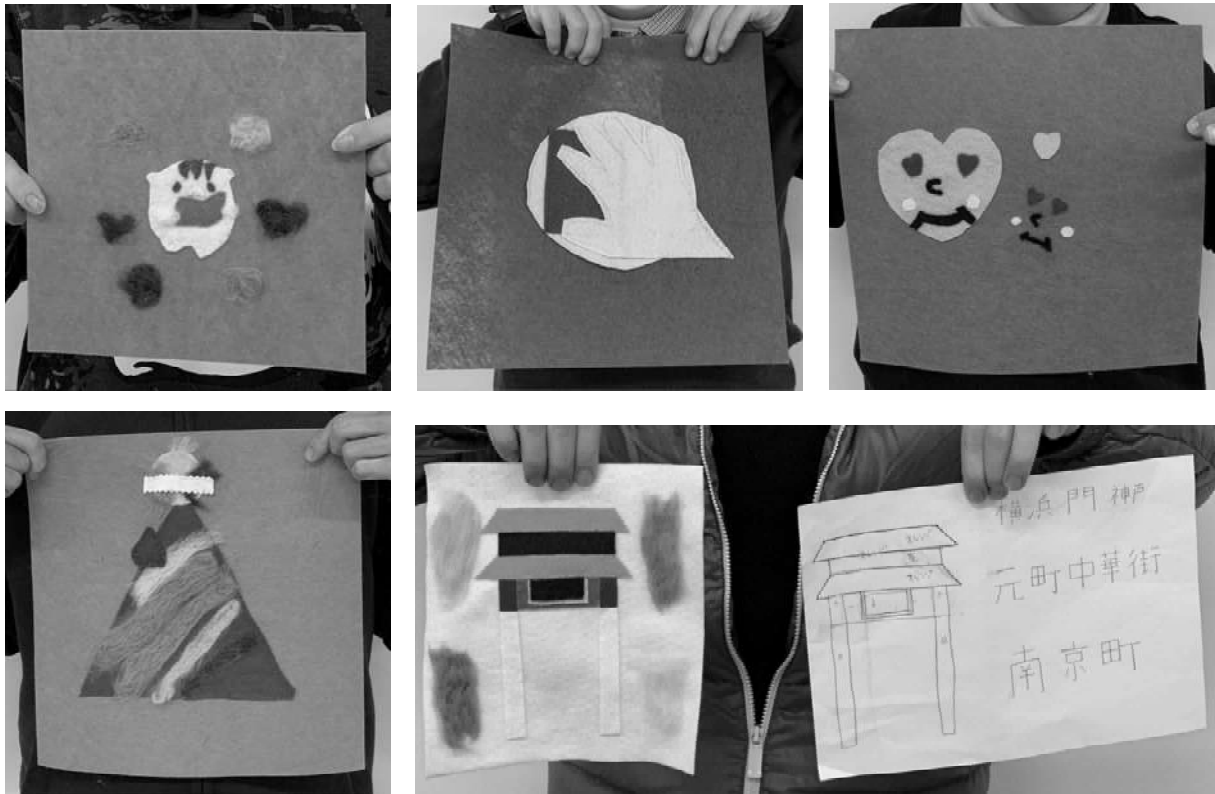
KUPI 学生が個別にサポートを受けつつ自らの手で作品を完成させたことで「自分でものづくりをする楽しさ」を味わうことができ、KUPI 学生にとって非常に有意義な時間であったことが感じられた。



頑張ってプスプスしています

<作品紹介>





「音楽する人間」～音楽表現活動を体験しよう！～ 講師：岡崎 香奈准教授

〈テーマ〉「音楽する人間」～音楽表現活動を体験しよう！～

〈概要〉・音楽の作用についてーコミュニケーション媒体としての音楽ー

・楽器/身体/声を使った音楽表現

〈内容・第1回〉

(1) 岡崎先生のピアノ演奏

岡崎先生が今の気分を表現したピアノの即興演奏をする。その演奏を聴いて、みんなで岡崎先生はどのような気持ちで演奏したのかを考える。「寂しい気持ち?」「ほっとした気持ち?」「冷たい気持ち?」といろいろな意見が KUPI 学生とメンター学生からでた。

(2) みんなの好きな音楽は何だろう

KUPI 学生とメンター学生が好きな音楽や歌手を紹介し合った。お互いに意外な好みや共通点を見つけられることができ「わたしもそれ好き!」「知ってる!」といった言葉で溢れ、楽しい時間であった。意外にも KUPI 学生はたくさんの音楽を聴いているようで、近くにあった紙などにビッシリと自分の好きな音楽を書いていた。また、KUPI 学生はみんなに自分の好きな音楽を語る事ができて、大変満足している様子であった。



(3) 楽器を使って表現してみよう！

① トーンチャイムを使って

トーンチャイムという楽器を使って、「音のキャッチボール(トーンキャッチ)」を行った。相手の方にトーンチャイムを向けて、音を鳴らし、受け取った人はまた他の人に向けてトーンチャイムを鳴らすというものだ。始めの方は、鳴らしても受け取ってもらえず、ヤキモキした様子が見られたが、途中からは「相手の目を見る」「2回鳴らす」といった工夫をして、なんとか相手に「次はあなたの番だよ」と伝えようとしている様子が見られた。



② 様々な楽器を使って

トーンチャイムの次は、岡崎先生のピアノとメンター学生のチェロの伴奏に合わせて、タンバリンやカスタネットといった小さい楽器を使って自由な演奏をした。楽譜がないからこそ、みんながのびのびと自由な表現をしていた。

〈内容・第2回〉

(1) トーンキャッチをもう一度してみよう！

第1回目るときとは違って、指揮者をつけてのトーンキャッチをした。1回目はメンター学生、2回目・3回目は対面で参加している KUPI 学生、4回目はオンライン参加している(初の試み!) KUPI 学生が行った。前回の授業では、全員が指揮者のような感覚になることのできる楽しさや面白さがあったが、指揮者をつけるとその指揮者の個性やみんなが一人に注目して演奏するような前回とはまた違った一体感が生まれた。オンライン参加の KUPI 学生が指揮者をした際には、その KUPI 学生が指差しをし、対面で演奏している KUPI 学生はその指差しを見ながら、誰が指差しされたか察して鳴らすというなんと大胆な演奏！画面上の指揮者の指や視線に真剣に注目して、なんとかして意図をくみ取ろうとする姿。私はこの演奏と演奏している KUPI 学生の様子が大好きだった。



(2) 『一週間』の歌の替え歌をしてみよう

① 『一週間』の歌の替え歌を考えてみる

ロシア民謡の『一週間』という歌を、自分たちの一週間に当てはめて替え歌を作った。

まずは、KUPI 学生とメンター学生それぞれが考えられるだけたくさんの、自分の『一週間』の歌を考え、その後、特に伝えたい曜日をそれぞれ取りあげて組み合わせ、3 番までの『KUPI みんなの一週間』を作詞した。

② 私たちの『一週間』を歌ってみよう

① の活動を通して完成した『KUPI のみんなの一週間』をみんなで歌った。

「♪ KUPI のみんなの一週間 ♪」

作詞：KUPI 学生&水曜メンター生

【1 番】

月曜日は ハーゲンダッツを食べて
火曜日は ディズニーダンスを踊る
水曜日は 仕事とマリンバ
木曜日は 仕事と海鮮丼
金曜日は コンビニ弁当買って KUPI に行く
土曜日は みんなとバスケット
日曜日は 水泳をして街中を散策する

【2 番】

月曜日は サークルに行って
火曜日は みんなと遊ぶ
水曜日は よーく食べて
木曜日は スマホでゲーム
金曜日は 手話単語覚えて
土曜日は 遅くまで起きる
日曜日は 昼まで寝て、そのあとは本を読む

【3 番】

月曜日は 大野智に会って
火曜日は 優しい気持ちになった
水曜日は 4人でカラオケ
木曜日は キャンプりとデート
金曜日は ドラマを見て
土曜日は バイトをしてる
日曜日は 神戸乗馬クラブに行ってムーミン君に乗るよ

〈考察〉

(1) 音楽を通して生まれるコミュニケーション

第1回目の授業内で自分の好きな音楽や歌手を紹介し合う時間では、自然とそこから会話が生まれ、お互いに意外な一面を見ることが出来る時間となった。自分の好きな音楽と他者の好きな音楽が同じでうれしいという感情だけでなく、相手の紹介を聞いて、「聞いてみたい！知りたい！」と自分の中に取り入れようとする気持ちが生まれることが共に学ぶことのよさであると感じた。そして、トーンチャイムを使った演奏は、音楽を通じたコミュニケーションであり、普段あまり話さない KUPI 学生同士が鳴らし合っている様子を見て、言葉以外のコミュニケーションの選択肢が授業内にあることの良さを感じた。

(2) KUPI 学生それぞれの参加の仕方

KUPI 学生みんなが、音楽が好きなのではない。音に苦手意識をもっていたり、演奏することになり気になれない人もいる。しかし、「もう受けたくない！」と投げ出す人は一人もおらず、「どうしよう？もう演奏しない？」とメンター学生が尋ねると、「自分はこの席から見るのが音の大きさ的にも丁度良いんだ」と自分が居心地のよい参加の仕方を模索し、自分の方法で参加しようとしている姿が見受けられた。このように自分で自分なりの方法を見つけて選択することの大切さを感じ、メンター学生は KUPI 学生に様々な選択肢を提案することを意識したいと改めて思った。

(3) 試行錯誤の対面とオンラインのハイブリッド授業でみてきたこと

はじめての対面とオンラインのハイブリッドで音楽の授業を行い、コーディネーターもメンター学生も探り探りの状態であった。そのような状態の中、多くの KUPI 学生から「チャットを上手く使えばいいのではないか？」「口で言ってもらったらどうか？」など授業をより良くするための意見がたくさんだった。今まではコーディネーターとメンター学生中心にそのような工夫を考えてきたが、今回の授業では KUPI 学生と共にオンライン参加の人も対面参加の人にとってもより参加できる形態を模索できたことに大きな意義を感じた。そして何より、KUPI 学生は対面のときよりもいろいろな人に自ら積極的に話しかける。いつも犬猿の仲(?)の二人までも…。普段は恥ずかしくて話せないが、オンラインだと半ば強制的に顔を合わせることになるため、話しやすいのだろうか。それを見ていて、とても新鮮でうれしく感じた。また、1 回目の授業では積極的に参加できなかった子も、いつもより人数が少ない対面の教室の中だと、前回よりも積極的に授業に参加している様子であった。KUPI の水曜日は大学教員による様々なジャンルの授業を一緒に受ける中で、KUPI 学生のいろいろな面が見られることが魅力であるが、対面とオンラインを併用する中でも KUPI 学生のいつもは見られない姿が見られて、とても考え深かった。

障害者の人権」 講師：井口 克郎准教授

〈テーマ〉「私たちの人権としての社会保障」

〈概要〉・日本国憲法と社会保障

- ・社会保障を劣化・解体しようとする近年の政府
- ・社会保障を守り、発展させよう

〈内容〉

(1) 日本国憲法と社会保障

①「憲法」って何？

憲法は政府の偉い政治家や公務員の人々が守らなければならない決まりであり、彼らが国民の“健康で文化的な生活”を実現するために仕事をしなければならないことが定められている。(日本国憲法 25 条)

②日本国憲法と社会保障

①にあるように、“健康で文化的な人間らしい生活”を営むことは、私たちの権利であり、政府はそのために社会保障などをよりよいものに向き上げていく義務がある。(日本国憲法第99条)そのため、社会保障を逆に引き下げたりすることは憲法違反なのだ。

③社会保障って何だろう？ 私たちの生活と社会保障

社会保障の制度は私たちが生き、健康で文化的な生活をするために不可欠な、国家責任による仕組みだ。ここで社会保障の制度の例が四つ挙げられる。一つは、高齢者や障害のある人の生活費を支給する「年金」。二つ目は、貧困に陥らないように国民の“健康で文化的な最低限度の生活”を保障する制度である、「生活保護」。これは社会保障の最後の砦だ。そして、三つ目は「医療・介護」。健康保険制度や介護保険制度がここに含まれ、すべての人に医療や介護を保障する。そして最後の四つ目は、障害のある人たちのそれぞれの必要性に応じたサービスなどを保障する「障害者福祉サービス」。これらの社会保障の制度をみていくと、身の回りには様々な社会保障制度があることを実感し、社会保障は私たちの生死を左右することが分かるだろう。

(2) 社会保障を劣化・解体しようとする近年の政府

ここでは、今起きている社会保障に関する問題を制度ごとに取りあげる。

①生活保護制度

政府は生活保護を受けている人たちの給付をどんどん引き下げている。そこで、今生活保護を受けている人たちが、政府を相手に全国で裁判を起こしている。(その数、約1000人)



②年金

高齢者や障害のある人たちの生活に大きく影響する年金も引き下げている。これに関しても多くの国民が全国で行政を相手に裁判運動を起こしている。(その数、約5000人)

③医療・介護

利用者の自己負担が増々引き上げられ、お金のない人たちが病院や介護サービスを利用しづらくなってきており、利用できる介護サービスも制限されてきている。必要な介護サービスが受けられず、在宅介護で思いつめた家族が殺人・心中してしまったりする事件もあとをたたない。

④障害者福祉サービス

障害のある人の福祉サービスについても、政府は抑制をもくろんできており、2006年から始まった「障害者自立支援制度」では、低所得の障害者からもサービス利用料をたくさんとることにした。これに対して障害のある人々が立ち上がり、行政を相手に裁判運動を起こした結果、厚生労働省と和解し、2010年に制度を改善することができた。

(3) 社会保障を守り、発展させよう

① 人間らしい生活をするには？

何度も述べるが、社会保障を引き下げる政策は、人権侵害にあたるといえる。より多くの人々が社会保障に関心を持ち、自分自身の権利を主張できるようになるためにはどうしたらよいのか。その一つの取り組みとして挙げたのが、社会保障のゆるキャラ「健康で文化的な生活ケン ぐらしー」だ。これは井口先生のゼミ生がデザインしたものであるが、KUPI 学生から一躍大人気な存在となった。社会保障運動は多くの人たちが出会い、輪が広がっていくものであり、楽しみながらすることがとても大事なのだ。

② みんなで「人間らしいぐらし」を語り合おう

ここからは KUPI 学生とメンター学生でディスカッションをした。お題は『“人間らしいぐらし”とはどのようなものか』『生活をしていくためには何が必要か』『どことなくらしをしたいか』だ。『“人間らしいぐらし”とはどのようなものか』ということに対しては意見が出にくかったが、『生活をしていくためには何が必要か』と『どことなくらしをしたいか』に関してはたくさんの意見がでた。その意見をまとめ、パソコンに写っている井口先生に向けて各班の KUPI 学生が発表した。以下 KUPI 学生とメンター学生からでた意見である。一部抜粋して記す。

○ “人間らしいぐらし”とはどのようなものか

皆が平等でいられること

○ 生活をしていくためには何が必要か

本を読むこと・食べること・遊ぶこと・健康・掃除・携帯・携帯の充電器・音楽・ドラゴンボール・任天堂スイッチ・筆記用具・ノート・パソコン・マフラー・エアコン・財布・お金・カメラ・アニメ・映画・仕事

○ どことなくらしをしたいか

一人暮らし・好きな人と暮らす(結婚、出産)・家族と暮らす・生活費がちゃんと払える

③ 井口先生の総括

すべての班が“楽しい生活をしたい”と強く願っていることが印象に残った。これも皆さんの“健康で文化的な人間らしい生活”のうちの“文化的なくらし”に含まれる。だからこそ、自分の望みを、自信をもって堂々と主張できるようになってほしい。



〈考察〉自分の生活を省みることのできるトピック

授業の最後にあった、KUPI 学生とメンター学生のディスカッションは大変盛り上がり、『“人間らしい暮らし”とはどのようなものか』ということに対しては意見が出にくかったが、『生活をしていくためには何が必要か』と『どんな暮らしをしたいか』に関してはたくさんの意見がでた。KUPI 学生は自分が受け取っている年金のことや、自分の家族に認知症の祖母がいること、それに関わる介護サービスに関することと照らし合わせながら、講義を聞くことができていた。また、コーディネイターやメンター学生もそうした KUPI 学生の生活を一部分であるが、知ることができた。講義を受けた全員が日々の自分自身の生活を省みることができ、大きな学びになった。ぜひ来年もこのような KUPI 学生にとって身近で大切なトピックの授業があることを強く願う。

3) 金曜日プログラム「話し合う！やってみる！」

【概要】

金曜プログラムでは、学生が卒業してからも続く生涯学習の礎とすることを目指して、対話と体験を通じた共同学習を行った。

今年度において意識したことは、「大学の知を拡げる」ことである。KUPI は高等教育の機会保障という側面が強く、大学が一般学生に提供している学びと同じものを提供することを志向している。だが同時に、これまで大学での学びの当事者として扱われてこなかった知的障害者が大学に入ってくることは、大学で当たり前とされてきた学び自体を問い直すきっかけでもあるはずである。

そこで、大学で行われている学びを KUPI 学生に体験してもらうことと同時に、教室の外に出ること、KUPI の外に発信することを志向する活動を考えた。KUPI は神戸大学の正規の教育プログラムでありながら、一般学生にその存在が知られているとは言いがたく、ほぼ分離されている現状がある。「大学に KUPI 学生が当たり前存在している」状態を作ることを目指した。

金曜プログラムの活動内容は、以下の表の通りである。

日時	活動内容
10/8	自己紹介・構内散策
10/15	六甲台キャンパス散策・感想発表
10/22	カフェ「アゴラ」での鑑賞会
10/29	読書会①『かないくん』・表現活動についての話し合い
11/5	詩を読む（0さん作）・詩を書く
11/12	人間科学図書館へ行く・借りた本の紹介 読書会②『おーい、でてこーい』
11/19	社会科学系図書館へ行く・体育館活動の話し合い
11/26	体験新喜劇①（台本読み合わせ）
12/3	体育館での活動
12/10	体験新喜劇②（リハーサル）
12/17	困りごとについての話し合い①・表現活動①
12/22	体験新喜劇③（発表）・クリスマス会
12/24	困りごとについての話し合い②・表現活動②
1/7	対話①・表現活動③
1/28	対話②・困りごとについての話し合い③
2/4	対話③

コロナ禍における制約、時間的制約から、「発信」の活動は展開の余地を残したが、メンター学生から提案された活動のほとんどを実現することができた。以下、活動内容を概略的に紹介する。

【金曜日プログラムのガイダンス・自己紹介と構内散策】

<ガイダンス>

- ・入学式の後にガイダンスを行った。KUPI 学生 13 名のうち 7 名は再受講生なので顔なじみも多いが、入学式の緊張感が続いていた。顔が見えるように丸くなって座り、好きなことや KUPI でやってみたいことを話してもらった。音楽やダンスがやりたい、手話や読書が好き、ヴィッセル神戸やプロ野球が好き、みんなで作品を作りたい、体を動かしたいなどたくさんの意見が出た。



<自己紹介と構内散策>

- ・金曜日プログラムの初回は自己紹介から始まった。輪の形に丸く並んで座り、隣の人と協力して毛糸を棒に巻き、コミュニティボールを作りながらながら話をした。話しに夢中になると手が止まるが、全員で巻きながら自己紹介をした。棒を渡す時、渡す相手に聞きたい事を質問する→受け取った人は質問に答える、という流れを作りたいかったが、これは難しかった。全員で作ったコミュニティボールが完成した。その後の金曜日プログラムでは、このボールを使って対話を進めた。



- ・コミュニティボールとは、対話をするために便利なツールで、哲学対話の手法である p4c に着想を受けつつ、KUPI で運用したルールは①ボールを持っている人が話す ②ボールを持っている人はパスをすることができる ③ボールを持っている人が次に話す人を選んでボールを渡す、とした。ボールを触る前には手指消毒を忘れず行った。

- ・後半は2グループに分かれて構内散策をした。外は暗く、この時間は教室もほとんど使われていない。夜の大学は怖いな～、でもちょっと楽しみ！みんなソワソワしていた。体育館やカフェ「アゴラ」、たくさんの校舎や施設を迷路のように歩き、車いすの KUPI 学生が安全に進めるように気を配りながら散策を楽しんだ。目が悪い友だちと手を繋いで歩く KUPI 学生もいた。途中、団体行動から外れて先に教室に戻る KUPI 学生もいたが、6階から見える神戸の夜景も堪能し、少しの散策でも色々なことが起こり、楽しいスタートになった。

【六甲台キャンパス散策と感想発表】

- ・初日の授業にて KUPI 学生が学ぶ鶴甲第2キャンパスの散策を行ったところ、「他のキャンパスにも行ってみたい」という声が多くあり、六甲台キャンパスの散策を行った。
- ・六甲台キャンパスには歴史的な建造物が多く、KUPI 学生は建造物を見たり、メンター学生による建造物にまつわる説明を興味深く聞いたりしていた。
- ・散策後、印象に残った場所について発表し合った。「校舎から見える神戸の夜景が綺麗だった。」「図書館に入りたい。」「たくさん歩いて疲れた。」といった感想が出た。
- ・六甲台キャンパスまで歩いて移動する際に、すれ違う他の神戸大学生や地域の人々に見られていた。ここで感じたのが、KUPI 学生が神戸大学生と認識してもらえていないのではないかということであった。KUPI の外へも学びを発信していくことの必要性を感じた。
- ・あらかじめ散策のルートは検討していたが、坂や階段が多かったり、車いすが通れない道があったりして、全員で歩いて移動することが大変だった。しかし、メンター学生が一人ずつ分かれ少人数のグループになっていたため、KUPI 学生と話す時間を多くとることができ、一人ひとりのことを深く知ることができた。



【カフェ・アゴラにて鑑賞会・感想発表】

- ・神戸大学附属特別支援学校の方々の作品がカフェ・アゴラにて展示されており、作品の鑑賞会を行った。アートを介して自己開示を行うことと、他の KUPI 学生がどんなことを考えているのか知ることが目的とした。
- ・KUPI 学生は、模写したり、遠くから眺めてみたりと様々な方法で作品を鑑賞していた。1つの作品に注目しても、人によって色やものの見え方が異なり、自分とほかの人の感じ方の違いを実感していた。

- ・好きな作品を発表し合うときには、「私もかわいいと思った」といったようにほかの人の感想に同意するような発言が多く見られた。一方で、「アートにはあまり興味はない」という率直な意見もあったが、誰も否定することなく受け入れる雰囲気ができていた。



【人間科学図書館へ行く・借りた本の紹介】

- ・はじめに司書の方から図書館の案内と利用の仕方について説明を受けた。その後、自由に図書館を歩き回ってみたり、借りたい本を探したりする時間をとった。図書館を利用したことがある KUPI 学生が、貸出の仕方がよく分からない学生に教えてあげている姿が印象的だった。
- ・ほとんど全員の KUPI 学生が本を借りていた。教室に戻った後、借りてきた本を紹介した。自分の好きなことに関する本だけでなく、中には統計学のような専門書や歴史書を借りている人もいて、学生が様々なことに興味を持っているということが分かった。



【社会科学系図書館へ行く】

- ・キャンパス散策の際には図書館に入ることができなかつたため、建造物としても歴史のある社会科学系図書館にも入ってみて欲しいというメンター学生の思いがあった。
- ・人間科学図書館とは異なり、KUPI 学生以外の利用者がいたため話すことができなかった。

KUPI 学生はじっくりと自分が借りたい本を探していた。

- ・図書館へ2度行ったことで、KUPI の授業が始まる前に図書館で本を借りる学生が増えた。



【読書会①「かないくん」】

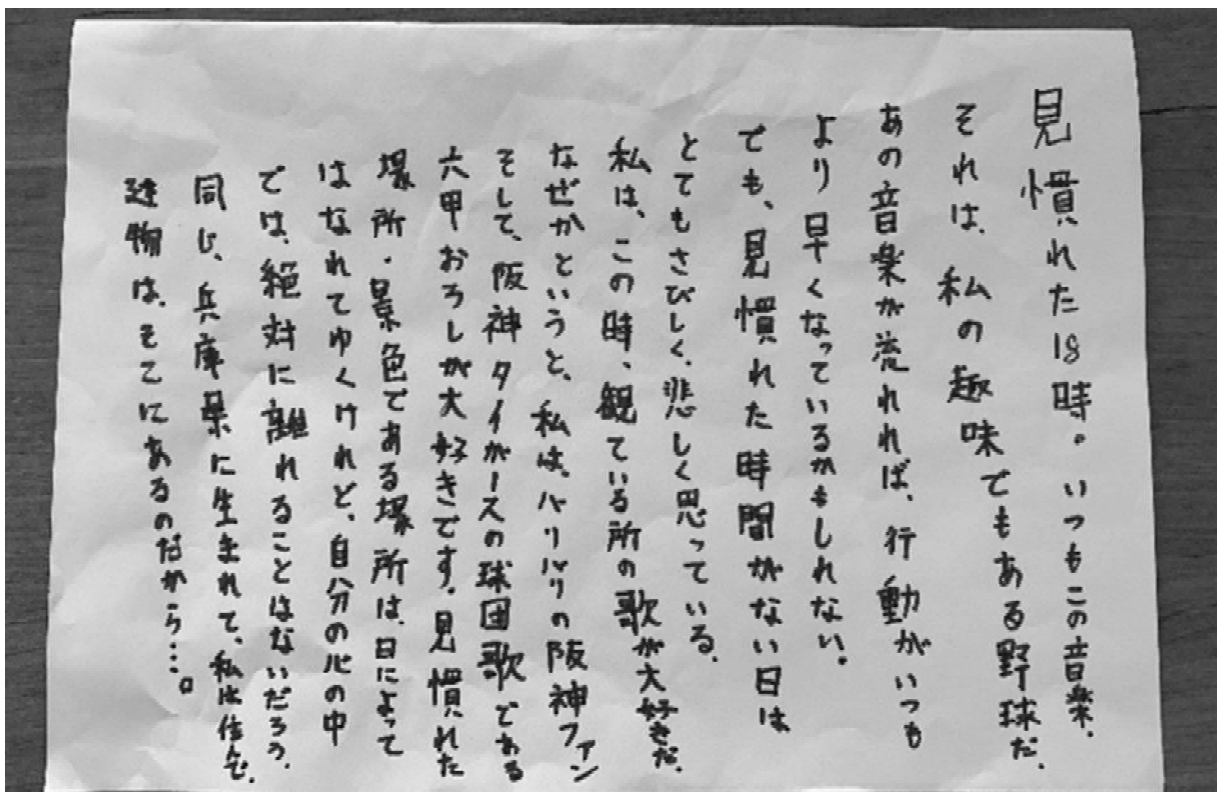
- ・読書会はメンター学生から KUPI 学生に提案し、実施するに至った。大学のゼミでは1つの本を読んで意見を交換し合う読書会を行うことがあり、大学の研究活動を KUPI 学生にも行ってもらえると考えた。
- ・題材となる本はメンター学生が選び、第1回目の読書会は『かないくん』という谷川俊太郎作の詩をみんなで読んだ。はじめにメンター学生が音読したあと、一人一行ずつ音読をした。
- ・KUPI 学生からは自分の過去の経験と結び付けたり、登場人物になりきって考えてみたりしていた。また、詩を読んで浮かんだ疑問を他の KUPI 学生やメンター学生にぶつけて、全員で考えることは1つの詩を全員で読むことの楽しさが表れていた。



- ・文字を読むことが苦手な KUPI 学生もいたため、全員が本を読むことを楽しめるような工夫が必要だと感じた。

【詩を読む（0さん作）・詩を書く】

- KUPI 学生の0さんが表現活動にて書いた「私の日常」という詩を読書会のテーマとして取り上げることとなった。その詩には、阪神タイガースの試合がある日の気分の高まりや、生まれ育った兵庫県への愛着が綴られていた。
- KUPI 学生は同じ教室で学んでいる0さんが作った詩ということもあり、いつも以上に積極的に感想や質問を述べていた。また、0さんは多くの人に自分の詩を読んでもらい、称賛の声をもらえたことが嬉しかったと話していた。
- 詩を鑑賞したあとは、「好きなもの」をテーマに詩を書いて、発表し合った。家族への感謝の気持ちを書いたり、好きなことを書き並べていたり内容は多様であったが、自分が作ったものを発信することの面白さを感じているようだった。一方で、なかなか言葉が上手くでてこなくて悩んでいる KUPI 学生もいて、自分の考えを言葉にすることの難しさも感じた。



【読書会②『おーい、でてこーい』】

- ・読書会の2回目は、星新一の『おーい、でてこーい』を読んだ。1回目で取り扱った本に比べ、分量が多かったためメンター学生が音読する形にした。
- ・KUPI 学生は文章中に出てきた分からない言葉を質問していた。
- ・普段から読書習慣のある KUPI 学生は、ストーリーを自分なりに内容を解釈して、積極的に意見を出していた。一方で、あまり読書をしない学生は内容を理解することに精一杯で意見を発表するまでは至らなかった。読書会で取り上げる題材選択の難しさを感じた。

【体育館での活動】

- ・体育館でどのようなアクティビティをしたいかについて、事前に話し合いを行った。やりたいことを KUPI 学生に提案してもらったところ、30以上の項目が出てきた。
- ・そこでメンター間で話し合い、みんなのできる活動と、みんながそれぞれにやりたい活動をどちらもできるように、体を動かす活動とあまり動かさない活動のどちらもできるように、以下のように内容を構成した。

前半：アクティビティ①

体育館の半面をボールを使う活動に、もう半面を鬼ごっこに使う

中盤：フリータイム：

休憩をしてもよいし、体を激しく動かさない活動や、少人数での活動をしてよい時間

後半：アクティビティ②

全員が参加可能なスポーツであるボッチャを行う

- ・当日、KUPI 学生たちはめいめい希望するアクティビティを行い、楽しんでいた。アクティビティ①では半面で風船を使った球技を、もう半面ではフラッグを使ったおにごっこを行った。フリータイムの時間には、希望者で絵しりとりを行った。アクティビティ②では、2面に分かれ、ボッチャを行った。
- ・KUPI 学生たちはアクティビティの変更や休憩も自由に行っていた。全体的に、KUPI 学生の満足度が高い内容となった。



【体験新喜劇】

- ・「体験新喜劇」活動を行う砂川氏、中川氏、堀口氏の指導のもと、『キミこそスターだ★KUPI 商店街の星』というシナリオで、KUPI 学生と金曜メンター学生が参加する、即興性の高い劇を作り上げる活動を行った。金曜プログラムの2回（11月26日、12月10日）を練習とリハーサルにあて、12月22日（水）に、保護者や他曜日メンター学生の前で発表した。
- ・内容は、さびれた商店街に悪徳芸能事務所がやってきて新人タレントオーディションを開き、商店街の店の人々がそれに参加するというものである。KUPI 学生はそれぞれ、商店街の人々、悪徳芸能事務所のタレント、ナレーションなどの役を選んだ。
- ・当初は身の置き所がわからず違和感を表明する KUPI 学生もいたが、さまざまな役を試す中で、それぞれの KUPI 学生が自分自身で役割を決めていった。
- ・リハーサル日から衣装や小道具を用意してくる KUPI 学生もおり、みな熱心に取り組んでいた。練習ではなかなかまとまりがつけづらかったものの、本番での KUPI 学生たちは、練習では見せなかったパフォーマンスを見せたりするなどして、それぞれの持ち味を存分に活かして演技を行っていた。



【KUPI クリスマス会 ～みんなで楽しもう！～】

- ・12月22日のプログラム終了後に、クリスマスパーティーを行った。企画、運営は水曜日メンターを中心にを行った。
- ・自由参加とアナウンスしていたが、当日はKUPI学生全員が参加した。サンタの帽子やトナカイのカチューシャを着けて参加してくれたKUPI学生もいた。
- ・新型コロナウイルス感染症対策のため、短時間での開催となった。しかし、KUPI学生はお菓子をたくさん詰めたり、メンター学生と写真を撮ったりなど、思い思いに楽しんでいた。プレゼント交換会も盛り上がり、「カイトが当たった！」「それ僕からのプレゼントだよ」など、KUPI学生同士で楽しく話している様子も見られた。

みんなで楽しもう！
途中参加、途中退室OK！

第3回KUPIクリスマス会

2021年12月22日(水) 19:30～20:15
F152(他学生がいる場合はB208)

19:30～19:50 お菓子パーティー
19:50～19:55 みんなで記念撮影
19:55～20:15 プレゼント交換会(希望者のみ)

持ち物

- ・お菓子(KUPI生、メンター1人200円ずつ)
パーティーのときに集めます
- ・プレゼント(プレゼント交換会に参加する人)
ラッピングも含めて1人500円以内、1つ作りはOK、生ものは不可
- ・クリスマスの帽子など(あれば)

短い時間ですが、みんなで楽しみたいと思います！
分からないことや質問などあればお気軽に、平さん、野村まで！
全員、水曜日メンター



【表現活動】

- ・言葉を使う「対話」以外の自己表現として、金曜メンターからダンス、音楽、絵、詩の選択肢を提示した。KUPI 学生はそれぞれ、やりたい活動についてグループに分かれ、何をするかを話し合った。(10月29日)



- ・12月17日、24日、1月7日に、話し合いの内容を踏まえて活動を行った。ダンス部屋においてダンスと音楽の表現を、講義室において詩と絵の創作を行った。
- ・それぞれの活動について、途中で気が変わったらグループの移動も自由であることを伝えた。移動は少なかったが、ダンスと音楽のグループが交流する場面があった。

<詩と絵>

- ・詩と絵の活動には、それぞれ一人ずつが参加した。詩を書く0さんと、ちぎり絵が得意なF君とで合作を作ることにし、ちぎり絵を背景に詩を配置した模造紙大の作品を仕上げた。
- ・F君が紙をちぎる作業をする間、0さんは家族との関係をテーマにした詩を早速書き上げた。そして、0さんの詩の内容をイメージした構成のちぎり絵を、F君、F君の介助の方々、メンター学生、そして途中から0さんも加わって仕上げた。ちぎり絵の上に詩を配置して貼り付け、作品を完成させた。



<ダンス>

- ・ダンスには6人の KUPI 学生が参加した。初回の話し合いでは、ダンスの授業で各自がしたいことを自由に発表した。自分の好きな曲や全員が知っている有名な曲などたくさん案が出てきた。また、踊りたい曲の名前だけでなく、「振り付けをせずに自由に踊る」「好きな服に着替えて踊る」「曲の途中で全員でポーズを決める」といった表現の仕方に関する意見も出てきた。次々と案が出ており、早く踊りたいという声が大きかった。
- ・1人ずつ好きな曲を選び、メドレーのような形で踊った。全員が好きなように踊り、中には踊らず歌で参加している KUPI 学生もいた。知らない曲がかかっても飽きたり、興味がなくなってしまうことなく、全員がほとんど休まず動き続けていた。
- ・2回目以降は、振りを揃えたり、決めポーズをしてみたりすることで一体感を感じるがあった。音楽の表現活動を行うグループと同じ場にいたため、音楽のグループが流す歌に合わせて踊ったり、手話歌に参加したりする場面も見られた。



<音楽>

- ・音楽の活動には主に5人の KUPI 学生が参加した。はじめに、参加者がこれまでの人生における音楽にかかわるエピソードや、好きなアーティストや楽曲の話をした。多くの人がそうであるように、KUPI 学生もまた、それぞれ生活の中で個人的に音楽を嗜好している。個人に分化された断片が紹介されあうだけでも、場は大いに盛り上がった。文化を介して他者と共同することの力強さを感じた。



- ・実際の活動の主軸としては、みんなで互いに選曲した楽曲をスピーカーで流しながら聞き合いつつ、手話のできる学生にならって、歌詞のあるものについては手話歌に挑戦した。また過去に和太鼓をやっていたという学生がおり、打楽器で音楽に合わせてリズムを楽しむなどした。コミュニティ音楽療法の文脈で、音楽が社会関係の結び目になる可能性が示唆されているように、言語ではない音の波をともに浴びつつ体を揺らし、場に居合わせることで身体的に関係性が築き上げられてゆく過程に、協同的な主体形成としての学びがあったのではないか。

【対話】

- ・金曜プログラムを貫くタイトルが「話し合う！やってみる！」であるように、学習の計画からその振り返りに至るまで、対話は全編通して意識的に取り入れられた。なお、対話場面においては哲学対話の手法である p4c にならって、輪になって座りつつコミュニティボールを回すことで進行した。
- ・ここでは 12 月以降、対話を主軸とした活動に焦点を当てる。これらは大きく二つに分けられる。一方は KUPI 学生の困りごとや悩み事を介した対話、そして KUPI のプログラム（主に金曜日について）を振り返り、省察することをテーマとした対話である。前者は 12 月 17 日および 24 日、1 月 28 日。後者は 1 月 7 日、28 日、そして 2 月 4 日。いずれも三回ずつ対話の機会を設けた。

<こまってる、なやんでいること>

- ・はじめに「こまってる、なやんでいること」と題した用紙を配った。そこには「こまり、なやみのタイトル」「こまり、なやみの発生場所」「なんでこまっているのか、なんでなやんでいるのか」「これからどうしたいか、どうなりたいか」という四つの記入欄を設け、タイトルと場所以外は文字以外の記入も可とした。この用紙への記入によって、まず自らの困りや悩み、あるいはそこからの希望に出会い、自らの言葉でそれらを整理する、という作業を事前準備として行ってもらった。
- ・初回の対話では、それぞれの悩みや困りごとを紹介し合った。それらにタイトルをつけて共有することで、語り直し、また外部化することで、悩みや困りを一人で背負うという状況から脱することを目指した。そこでは、自立や一人暮らしに関すること、職場や家族における人間関係、あるいは今後の人生における身の振り方など、さまざまに切実な語りが現れ、共感しあうような空気が形成された。
- ・メンターも同様の条件で参加したのだが、ここでは KUPI 学生かメンターかという線引きは揺らいでいた。すなわち、「知的障害」という属性のもとに集まっている KUPI 学生は「障害」をめぐる困難ばかりに焦点が当てられ、配慮されようとされやすい中、「障害」に端を発しない困難が共有されることで、「障害/非障害（健常）」および、それに基づく「支援/被支援」の関係が問い返される、という状況が生じていたと言える。また、他者の語りによって抱えていても自分だけでは言語化できなかった悩みに出会う、という状況も見受けられた。

- ・二回目の対話は、互いの悩みごと、困りごと、に共通項を見出し、共有するという内容になった。大きく「働くこと・暮らすこと」と「現すこと・隠すこと」という類似性に抽象化することとなった。自らの課題を他者とともに行うこと。あるいは他者の課題を自らのものとする。その往還がなされていたと言える。
- ・三回目の対話では、類似するテーマの困り、悩み事ごとにグループに分かれて、いくつかの少人数で対話を行った。実際には「一人暮らし」「働くことと人間関係」「自己表現・自己実現」の三つのテーマごとにグループを形成した。それぞれ、共通する課題を介し、かつ少人数であるため、より具体的な状況や、解決策の検討にまで対話が展開した。

<省察の対話>

- ・金曜プログラムの締めくくりとして、振り返りをテーマとした対話を三回行った。いずれも、あらかじめ主題を提示しつつ、一時間ほど時間を設けてメンターがファシリテーションを行った。
- ・初回のテーマは対話そのものの省察であった。すなわち、ここで述べているような輪になって向かい合い、ボールを回しながら互いに語り合うという活動そのものの振り返りである。皆が聞いてくれている、待ってくれている、という場の安心感に言及がなされるなどした。なお、この回は全員対面での参加となった。
- ・二回目のテーマは、金曜プログラムの活動の振り返りであった。この回はコロナウイルスの影響により、ズームを利用したオンラインメインでの進行となった。オンラインへのアクセスが困難な学生については、大学で個別にオンラインへの参加方法を設けることによって対応した。冒頭にこれまでの活動を映した写真を見ながら内容を思い出した上で、各々が印象に残る場面などを共有した。
- ・三回目のテーマは KUPI 学生のうち一名、言語操作が困難な重度の障害を抱える F 君が共同学習者としてどのような存在であったか、というものであった。オンラインと対面のハイブリッド形式で行った。言語ではなく身体的なコミュニケーションの可能性や、精神的な共感に言及がなされ、F 君が学びを共にする仲間として居たということが力強い言葉で語られた。複数の主体による言葉によって、言表の困難な F 君の像が間主観的に形作られ、これは例えば今まで重度の知的障害のある人を表す語りとして参照されてきた支援者や保護者による意味づけとは異なる質のものだと考えられる。

